

GSJ コミュニケーションズ

PROCEEDINGS OF THE SOCIETY

追悼文 外村 晶先生の死を悼む 佐々木正夫
寶 来 聰 博士 高畑 尚之

東京大会ニュースその一 日本遺伝学会第77回大会案内

■大会委員長からの歓迎メッセージ

学会長挨拶 「日本遺伝学会へようこそ」

GSJ サロン 「マディソン留学の思い出」

— 特別セミナー —

「Age and sex effects on human mutation rates : an old problem with new complexities」 J.F.クロー

日本遺伝学会第1回幹事会の話題 — 新2か年計画へ —

* 新任幹事挨拶 遠藤 隆編集長、福井希一渉外庶務幹事、品川日出夫特別幹事

「日本遺伝学会木原賞および奨励賞候補者推薦のお願い」

シンポジウムの紹介

国際シンポジウムのお知らせ

Plant Axis Formation and Signal Transduction

日本学術会議主催公開シンポジウム

「動植物育種の未来とゲノム研究」 育種学研究連絡委員会

男女共同参画のシンポジウム記録 — 日本分子生物学会

<日本学術会議レポート> 黒川会長コメントほか

* 神奈川科学技術アカデミー教育講座受講生募集

基礎から学ぶ遺伝子実験コース

シグナル伝達と疾患コース<新規開講>

* 千里ライフサイエンスセミナーブレインサイエンスシリーズ

* 千里ライフサイエンスシンポジウム

第8回マリンバイオテクノロジー学会大会 (マリンバイオ熊本2005)

山崎貞一賞 第5回 (平成17年度) 財団法人材料科学技術振興財団山崎貞一賞候補者募集

2005年度新規研究課題募集のお知らせ

生物系産業創出のための異分野融合研究支援事業

独立行政法人 農業・生物系特定産業技術研究機構 生物系特定産業技術研究支援センター

「組換え植物実験について依頼」 日本植物生理学会

本
会
記
事

・ GGS編集長が交代しました。

・ J.STAGEの利用規約改訂

・ 2005・2006年度新役員名簿

・ GGSアクセス1月の結果

・ 新年度第1回評議員会日程

・ 会員異動

GENETICS SOCIETY OF JAPAN

◆創立1920年◆

日本遺伝学会

目次	頁
1. 追悼文 外村 晶先生の死を悼む 佐々木正夫	3
寶来 聡博士 高畑 尚之	5
2. 大会委員長からの歓迎メッセージ 五条堀 孝	7
東京大会ニュースその一 日本遺伝学会第77回大会案内	7
3. 学会長挨拶 「日本遺伝学会へようこそ」 石和 貞男	9
4. GSJ サロン 「マディソン留学の思い出」 長岐 清孝	10
5. 一特別セミナー— 「Age and sex effects on human mutation rates: an old problem with new complexities」 J. F. クロー	12
6. 日本遺伝学会第1回幹事会の話題—新2か年計画の布石—	13
* 新任幹事挨拶 遠藤 隆編集長, 福井希一渉外庶務幹事, 品川日出夫特別幹事	15
7. シンポジウムの紹介 国際シンポジウムのお知らせ 「Plant Axis Formation and Signal Transduction」	4
日本学術会議主催公開シンポジウム 「動植物育種の未来とゲノム研究」 育種学研究連絡委員会	6
男女共同参画のシンポジウム記録—日本分子生物学会	16
8. <日本学術会議レポート> 黒川会長コメントほか	18
9. 催し紹介 * 神奈川科学技術アカデミー教育講座受講生募集 基礎から学ぶ遺伝子実験コース	8
～集中実習・実験により基本的なバイオテクノロジーを習得しよう～ * シグナル伝達と疾患コース<新規開講>	11
～シグナル伝達の異常と各種疾患発症の因果関係～ * 千里ライフサイエンスセミナーブレインサイエンスシリーズ	21
第18回「ストレスに耐える脳, 耐えられない脳」 * 千里ライフサイエンスシンポジウム	21
「RNA 機能研究の最先端」 * 第8回マリンバイオテクノロジー学会大会 (マリンバイオ熊本2005)	22
10. 募集のお知らせ 第5回 (平成17年度) 財団法人材料科学技術振興財団 山崎貞一賞候補者募集	19
2005年度規程研究課題募集のお知らせ ——生物系産業創出のための異分野融合研究支援事業——	23
11. 「組換え植物実験について依頼」日本植物生理学会	24
12. 日本遺伝学会本原賞および奨励賞候補者推薦のお願い	27
13. 本会記事	34
・ GGS 編集長が交代しました	・ GGS アクセス1月の結果
・ J. STAGE の利用規約改訂	・ 新年度第1回評議員会日程
・ 会員異動	・ 2005・2006年度新役員名簿

会長日々

“教育交流は、「国家を人々に変える」、すなわち国際関係を人間的にすることができる。私は教育交流が人々の間に必ず友好的な感情をもたらすものだとは思わないし、またそれを目的とすべきだとは思わない。ただ、人間として共通の感情を喚起できること、自分達の国で育った人々と同じように喜びや悲しみ、残酷さや優しさを共感できる人々が住んでいる、ということが実感できれば充分だと考える”。私とは、今は亡きJ. ウィリアム・フルブライト アメリカ合衆国上院議員。この言葉は、科学と社会、科学者と市民の対話を考えることが多くなった今日、私 (石和) の頭から離れない。遺伝学者コミュニティー諸氏と是非分かち合いたい言葉である。



追 悼



外村 晶先生の死を悼む

東京医科歯科大学名誉教授外村晶先生が平成16年8月15日、肺気腫のため永眠された。享年78歳。厳格な研究姿勢の中にも、不思議に人の心を引きつけて止まない人間的魅力は何だったであろうか。振り返ってみれば、私の研究者生活は常に外村先生とともにあった。北大院生の時は先輩として、東京医科歯科大学時代は上司として、京都に移ってからは真に心を割って相談できる恩師として筆舌に尽くし難い指導を受けた。4年前にお宅に伺ったときには、足はご不自由の様子であったが、まだまだお元気で、がんの染色体分析など臨床検査の仕事をしておられた。8月15日の未明、泰子夫人から「外村が亡くなった」という電話が入り、私の心にぽっかりと大きな穴が開いたような気持ちで急いで新幹線に乗った。

外村先生は、1926年7月23日、作家外村繁（1902－1961）の長男として滋賀県五個荘村に生まれ、三高から北大理学部動物学科に進み、同大学院（担当：故牧野佐二郎教授）に進学、途中助手となり、1955年から2年間米国ボストン小児がん研究所（担当：チャイニーズハムスターを実験動物として確立したばかりのG. Yerganian 教授）へ出張、など当時北大を中心に最先端を走っていた動物がん染色体研究の先鋭戦士として活躍した。

ちょうどその頃である。ヒトの正常染色体が明らかになり（1956年）、先天性疾患の染色

体異常に関する第一報が公表された（1959年）。帰国すると直ちに自らの研究ベクトルを動物がんからヒトがん、ヒトの先天異常に向けた。1960年に発表したダウン症10例の染色体研究の論文は、我が国における臨床細胞遺伝学の幕開けである。外村先生は一般には完全主義者と言われるが、「機を見るに敏」という鋭い先見性が同居していると言える。ダウン症の研究は、その後、1961年に国立遺伝学研究所に移ってからも進められ、1966年より東京医科歯科大学に新設の細胞遺伝学研究部門を主宰されてか

ら1992年の退官まで一種のライフワークとなった。2,000例におよぶダウン症の染色体異常の研究は、世界にも類例を見ない規模のダウン症染色体の集団構造として国際的にも有名である。

低線量放射線被ばくによる遺伝リスク評価に対する関心が高まると、一般集団の染色体異常発生率の重要性をいち早く見抜き、ヒト一般集団を対象に、新生児から60歳まで、10歳間隔で全ての型の染色体異常の発生頻度を確定した（1983年）。このデータは、今日では染色体異常による被ばく線量評価の国際的ゴールドスタンダードとなっている。1例につき1,000細胞、各年齢群当たり10,000細胞以上という膨大な数の細胞を、全て顕微鏡写真確定法によって分析しているからすざましい。この中にも信念とも言える厳密さが窺え、他



の追隨を許さない誇れる研究である。

AF2 という物質の名前はご記憶にある方も多いと思う。1971年には、当時防腐剤として多くの食品に添加されていた合成殺菌剤 AF2 (furylfuramide) に染色体異常誘発作用があることを発見した。食品安全に警鐘を鳴らした最初の出来事である。外村先生の真価は、データを提示して行政に規制措置を訴えたことにある(1974年8月に使用禁止となった)。突然変異と発がんの関係の理解が限られたものであった当時、遺伝学者は興奮しすぎるという批判もあった。1972年には環境変異原研究会(後の環境変異原学会)が発足し、変異原性が健康障害の予測指標として確立された今日では隔世の感がある。しかし、ダウン症患者の家族に対する親身の遺伝相談から築かれた患者家族との強い信頼関係からも窺えるように、昨今つとに叫ばれる科学者の説明責任は、外村先生にとっては本質的に研究と一体のものであり、それを体現してきたのが外村先生の科学の心であったと言える。単に実験室にとどまらない社会との対話は退官後も最後まで続いた。

外村先生は、お酒を、しかも赤提灯居酒屋をこよなく愛された。席を共にされた方も多いと思うが、これも研究の延長線上にあったように思う(研究哲学の広場のようなもの)。お酒を飲んでいるときでも本音と建前の付き合いを鋭く察知され、時には「お前さん、もう帰っていいよ」ということになる。しかし、大方は飲むほどに激論となり、果ては喧嘩別れとなる。その繰り返しだったように思うが、またせせと赤提灯に通う。晩年は2回の手術のため体力は消耗していたが、亡くなられる2日前にも染色体分析をやっておられ、前夜はオリンピックの開会式のテレビを見ながら晩酌をしておられたと聞き、最後まで豪快で炎ゆるごとき青春であったと思った。その人間味あふれる研究姿勢は現代の干からびた研究者に一石を投じ、絶対に必要な潤滑油であろう。お疲れさまでしたと淋しく筆を置く。

佐々木 正夫

国際放射線研究連合会長
京都大学名誉教授

植物の発生とシグナル伝達に関する国際シンポジウムが下記要領で開催されます。多数の方のご参加をお待ちしています。

国際シンポジウムのお知らせ

Plant Axis Formation and Signal Transduction

日時: 2005年3月2日, 3日 9:30~18:00

場所: 東京大学弥生講堂(東京都文京区弥生1-1-1)

主催: 文部科学省科研費特定領域研究「植物の軸と情報」(代表: 福田裕穂)

科学技術振興機構戦略的創造研究推進事業(CREST)「植物発生における細胞間シグナリング」
(代表: 岡田清孝)

第1部 国際シンポジウム

予定講演者: Kathryn Barton, Gerd Jürgens, Robert A. Martienssen, Ben Scheres, Rüdiger Simon, Zhenbiao Yang, 荒木 崇, 福田裕穂, 町田泰則, 松岡 信, 岡田清孝, 島本 功, 田坂昌生, 鳥居啓子, 山本興太郎

第2部 ポスターセッション

海外招待演者の研究室所属の若手研究者

特定研究およびCRESTの班員(第1部の発表者を除く)

参加無料。多くの方の参加を歓迎いたします。

ホームページ: <http://www.biol.s.u-tokyo.ac.jp/users/hasseipl/webpage/webpage.html>

キャンパスマップ: http://www.u-tokyo.ac.jp/campusmap/map01_01_j.html

お問い合わせは広報担当(上田貴志, 平野博之)へ。 infoaxis@biol.s.u-tokyo.ac.jp



追 悼



寶 来 聰 博 士

寶来 聰さんと私は共に昭和21年生まれであり、大変よく似た社会的、学術的潮流に身を置いてきた。研究上の付き合いは、寶来さんが昭和57年9月に国立遺伝学研究所の人類遺伝部研究員になって以来である。しかし、平成10年4月に新設されて間もない総合研究大学院大学の生命体科学専攻の教授として着任してからは、研究というよりは専攻運営に関することが共通の関心事になってしまった。この点については別の機会に記すこともあると思うので、ここでは遺伝研時代からの寶来さんのライフワークに関連した思い出で追悼することにしたい。

寶来さんの業績はなんといっても先駆的な分子人類学の研究にある。とくにミトコンドリアDNAを分子マーカーとして駆使した研究は、分子人類学の発展に大きな貢献をした。寶来さんはかねてより人類進化には3つの大きな謎があるといい、その究明をライフワークとしてきた。ヒトと類人猿の系統関係、現代人の起源、および日本人の起源の究明である。いずれの研究課題でも母性遺伝をするミトコンドリアDNAが研究の主役であった。このことが、私が当時興味をもっていた集団遺伝学の問題と重なり共同研究をするきっかけとなった。

周知のように、ヒトを含む霊長類のミトコ

ンドリアDNA全長は約1万6千塩基対である。ポストシーケンスの時代となった今日

では大した長さではないが、90年代前半では勿論そうではなかった。しかも計画は全長ミトコンドリアDNAをさまざまな霊長類で決定し比較することであったから、当時としては革新的な試みであった。また、コンピュータの入出力や使用できる解析プログラムもわずかであり、膨大なデータの解析は手作りで行わなければならなかった。大の大人がふたり夜遅く計算機室に入り、寶来さんが逆ストランドにコードされている遺伝子の塩基配

列を読み上げ、私がキーボードをたたいて入力したことが忘れられない。

いまでは信じられないような苦勞のあげく、ヒトにもっとも近縁な霊長類はチンパンジーであり、その分岐年代は約5百万年前であることが分かった。T. ハックスレー以来3分岐問題として議論されてきたことが解けただけでなく、確かな分岐年代の推定もできたのである。5百万年前という分岐年代はカリフォルニア州パークレー校のA. ウィルソンらの免疫交差反応を利用した推定値と同じであるが、当時またそれ以後もとんでもない推定値がまことしやかに発表されてきた経緯がある。いずれにしても、90年代半ばから分子人類学は黄金時代を向かえたが、寶来さんの信頼性の



高い研究がその先鞭をつけたといっても過言ではない。

現代人（新人）の起源に関しては、80年代から単一起源説と多地域起源説の論争があったが、87年にA. ウィルソンらが現代人の祖先による完全置換モデル（ジャーナリズムの世界ではミトコンドリア・イブ仮説）を提案して以来、その論争は一層激しいものになっていた。日本でも論争に落ち着きがみられるようになったのは、つい最近のことである。寶来さんは、アフリカ、ヨーロッパ、日本を含むアジアの各地域におけるミトコンドリアDNAの完全配列を比較することによって現代人の祖先とネアンデルタールなどの旧人との間には混血がなかったことや、アフリカ集団の高い多様性から現代人の起源が約14万年前になることをいち早く示した。この成果はサイエンスでも取り上げられ、その後寶来さんの150余の論文のなかでも最も多く引用されるものになった。その他、縄文人骨からミトコンドリアDNAの抽出に成功し、それと同一のタイプが東南アジアにあることを示したことや、ミトコンドリア疾患（ミオパチー）についての原因変異を究明したことも記憶に残る。

日本人の起源の研究では、日本人のみならず東アジアの諸民族を含めたサンプルに対し

てミトコンドリアDNAの解析を進めた。この研究は総研大のグループ研究「生命体科学」の一課題としてでもあり、寶来さんに総研大の新しい専攻に赴任してもらう直接的な動機となった。ミトコンドリアDNAを中心としたこうした成果は、岩波科学ライブラリー「DNA人類進化学」に取りまとめられている。総研大に移ってからは、父性遺伝をするY染色体の解析も行い、アイヌや沖縄の人々の系統地理学的知見を得たり、縄文・弥生混血説を支持したりしていた。さらに、生物多様性と共生の問題を手掛け、マダガスカル島の固有種であるバオバブの地理的分布と多様化に関する分子系統学的研究を開始していた。生命体科学専攻として総力をあげたプロジェクト研究を目指していたところであり、志し半ばでの突然の中断は残されたものにとって痛恨の極みとなった。

寶来さんが分子人類学で一時代を築いたことは多くの人の共通した見方であろう。改めて御冥福を祈り哀悼の意を表したい。

高畑尚之（総合研究大学院大学）

（編集者註：この追悼文はDNA考古学研究会および執筆者の許可を得て転載したものである。）

日本学術会議主催公開シンポジウム

「動植物育種の未来とゲノム研究」

日時：平成17年6月11日（土）13：00～17：30

会場：東京大学農学部1号館8番教室（東京都文京区弥生1-1-1）

最寄り駅：地下鉄南北線「東大前」または地下鉄千代田線「根津」

<講演者>

田畑 哲之（かずさDNA研究所）	「育種研究とゲノム研究の融合は可能か」
田中 良和（サントリー・先進技術応用研究所）	「フラボノイドの代謝工学—青いバラを中心に」
杉本 喜憲（畜産技術協会動物遺伝研究所）	「ウシゲノム解析とDNA育種」
嶋田 透（東京大学農学部）	「カイコゲノムに存在する鱗翅目昆虫特異的な遺伝子」
佐々木卓治（農業生物資源研究所）	「高精度イネゲノム塩基配列情報と育種戦略」

主催：育種学研究連絡委員会

参加費：無料

問い合わせ先：吉田 薫

〒113-8657 東京都文京区弥生1-1-1 東京大学大学院 農学生命科学研究科

tel: 03-5841-8086

e-mail: ayosida@mail.ecc.u-tokyo.ac.jp

日本遺伝学第77回大会へのお誘い

国立遺伝学研究所・生命情報DDBJ研究センター

五條堀 孝

今度、日本遺伝学第77回大会を、2005年9月26日(月)から29日(木)まで、東京の代々木にあります独立行政法人国立オリンピック記念青少年総合センターで開催することになりました。私は、その大会の委員長として、遺伝研の先生方のご協力により、お世話をさせていただいております。

本来は、遺伝研のあります静岡県の三島市で行うのがいいのですが、若い方々の参加をできるだけ増やしたり、一般の口頭発表を大切にしながらミニシンポジウムを増やしていくのがいいのではないかということになり、皆様の交通の便がもっともいい東京で行うことと致しました。

また、本大会のテーマを「生命現象の統合的理解としての遺伝学」と定め、従来の遺伝学会参加者の方々の分野だけでなく、幅広い遺伝学の分野の人々を本大会にお誘いできたらと思っています。また、できるだけ若い学生、院生や研究者の方々にも参加していただきたく思っています。遺伝学会のさらなる発展に貢献するように、準備委員一同しっかり頑張っていきたいと思っておりますので、ご参加やご協力の程どうかよろしくお願い申し上げます。



大会ニュース (その1)

2005・9・26~29

東京

日本遺伝学会第77回大会案内

2005年の第77回大会は、国立オリンピック記念青少年総合センターを会場に、下記のような企画で準備を進めております。カレンダーに下記の日程をメモしてください。第77回大会について企画および提案がございましたら、至急準備委員会事務局までご連絡下さい。

1. 会 場 国立オリンピック記念青少年総合センター
〒151-0052 東京都渋谷区代々木神園町3番1号
2. 会 期 2005年9月27日(火)、28日(水)、29日(木)
なお、9月26日(月)に市民公開講演会の開催を予定しております。
3. 企 画 ☆一般講演 9月27日(火) 午前 28日(水) 午前 29日(木) 午前
☆メインシンポジウム 9月27日(火) 午後
☆ミニシンポジウム 9月28日(水) 午後、夜、9月29日(木) 午後、夜
☆特別講演・総会 9月27日(火) 午後
☆懇親会 9月27日(火) 夜
☆一般科学講演会 9月28日(水) 午後
4. 関連集会 会議中、またはその前後に関連集会を予定されている方は、2005年3月31日(木)までに集会名・期日などを準備委員会事務局へご連絡下さい。
5. 参加・講演申し込み
本大会でも、参加・講演申し込みは、ホームページからの申し込みとし、締め切り

は2005年7月31日の予定です。詳細につきましては、次回以降の大会ニュースでお知らせ致します。

6. 現在、国立オリンピック記念青少年総合センターで保育室を準備することが可能か検討中です。こちらの結果につきましても、次回以降の大会ニュースでお知らせ致します。

7. 日本遺伝学会第77回大会準備委員会

大会委員長 五條堀 孝

国立遺伝学研究所 生命情報・DDBJ 研究センター

〒411-8540 三島市谷田1111

TEL: 055-981-6847 FAX: 055-981-6848

E-mail: tgojobor@genes.nig.ac.jp

大会副委員長 館野 義男

国立遺伝学研究所 生命情報・DDBJ 研究センター

〒411-8540 三島市谷田1111

TEL: 055-981-6857 FAX: 055-981-6858

E-mail: ytateno@genes.nig.ac.jp

8. 連絡先

準備委員会事務局 鈴木 善幸・上田 陽子（秘書）

国立遺伝学研究所 生命情報・DDBJ 研究センター内

〒411-8540 三島市谷田1111

TEL: 055-981-6847 FAX: 055-981-6848

E-mail: iden7709@nig.ac.jp

神奈川科学技術アカデミー教育講座受講生募集

基礎から学ぶ遺伝子実験コース

～集中実習・実験により基本的なバイオテクノロジーを習得しよう～

■カリキュラム編成者 東京工業大学大学院 生命理工学研究科 教授 医学博士 半田 宏

■コースの特色・ねらい

本コースでは6日間を費やして、みなさん一人一人に遺伝子のクローニングの操作を最初から最後まで通して行っていただきます。出発材料であるヒト培養細胞からの全RNAの抽出に始まり、RT-PCR（逆転写-ポリメラーゼ連鎖反応）による目的cDNA（相補DNA）の増幅、目的cDNAのプラスミドベクターへの挿入、大腸菌形質転換体からの組換えプラスミドの調製、そして目的cDNAの塩基配列の決定までを行います。これから遺伝子関連技術の導入を考えている方、バイオテクノロジーを知らないが興味ある方、もう一度大学で基本を学びたい方など、様々な方々の参加を期待しています。

■講義日 H17. 3/7～3/12 計6日間

■主なカリキュラム内容

【実習】 ヒト培養細胞からの全RNAの調製／RT-PCRによる目的cDNAの増幅／アガロースゲルの作製／RNAおよびPCR反応物のアガロースゲル電気泳動／目的cDNAのプラスミドベクターへの組み込み／大腸菌の形質転換／形質転換体の計測／形質転換体の植菌／組換えプラスミドDNAの調製／DNAシーケンシング／結果の解析

【講義】 アフィニティビーズを利用したナノテクノロジー／インターネットによる遺伝子情報の解析法／ゲノム医科学の課題と最先端

■実習場所 東京工業大学すずかけ台キャンパス（横浜市緑区長津田町）

■受講料 一般 160,000円 KAST法人賛助会員（事業所単位）・神奈川県内中小企業 128,000円

■申込締切日 平成17年2月7日（月） ■募集人員 24名

「日本遺伝学会へようこそ」

2005年2月立春 石 和 貞 男

新年度のはじまりにあたり、ひとことご挨拶申し上げます。日本遺伝学会の前身は、大正4年2月12日に日本育種学会として発起人会が開催され、その後協議の末大正9年6月に会の名前を日本遺伝学会とし日本育種学会の事務その他一切を継承し今日に至ったと記載されています⁽¹⁾。この経緯は学会創設者の一人故田中義麿博士に詳しいところですが、博士の滞英中1920年には時を同じくしてイギリス遺伝学会が設立されました。「日本では数年前から育種学会という遺伝の会が出来ていますよ」と言って、あのベイツソンを驚かせたそうです。大変愉快だったと後に思い出を語っておられます。国際水準の学会誌発行を目指して活躍されました気概溢れる先達に心から敬意を表したいと思います。



メンデルの発見に内包されていた、いわゆる Heredity と Genetics の相互依存型の体系が幾度となく影響し合いながら今日の遺伝学に至ったのは皆様周知の通りです。翻って新世紀の文化の在り方自身に変化が予測され、より個人的な価値観が重視され、個性化と同時に多様性が注目されています。一方で現代遺伝学の展開はゲノムレベルのデータを取り込んだ新時代に入り、遺伝学が培って来た体系、生命探求の歴史は一段と重要な意味をもち、あまねく生命と向かいあう学術活動に強い影響を与えております。これからの人間文化のベースラインにかかわる科学的知見が期待されていると言っても過言ではないでしょう。個人の存在は生命の悠々たる大河の一滴と擬されるが、自ら引き継いだ全遺伝子 DNA がたどって来た有為転変の川筋を殆ど自覚出来ぬままに時が過ぎる。なかなか一筋縄では理解できない個性的な遺伝子もあって35億年かけてきたゲノムの奥深さに興味はつきません。ところで、これから科学技術の所産は従来では想像も出来ない学術的なそして社会的な流れを作り出し全地球を覆う可能性も否定で来ません。問題は誰もその深刻さを予測できないままに、推移して行くことです。地球環境問題が最大課題となって迫る21世紀にあって、いまこそ人類の叡智が統合的に問われていることを私たちは忘れてはなりません。このことに関連して、一言付け加えておきたいことがあります。生命社会のバランス、人間のもつ「らしさ」を担うシステムとはあるとすれば、どういうものか。システムの安定性は議論出来るのであろうか。生命体システムの破壊として疾病を考えることはすでに久しい。しかし高次機能レベルでのシステム破壊のリスク・リテラシーは、遺伝学研究者にとっても緊急課題と考えたい。人間の尊厳にかかわることなのだから。

このような状況にあって、遺伝学者コミュニティとしての本学会の在り方、ないしは役割にも新しい努力が求められていると考えるべきでありましょう。そのいくつかを列挙しますのでご意見を頂ければ幸いです。それぞれについて、会員からの声を頂き具体案を作成して、随時評議員会にはかり幹事会で実行する予定です。先ず「遺伝学的知の統合化」をコミュニティの総力を挙げて取り組みたいと思います。いろいろな施策を考えています。次に、若者への期待、若い才能を大切に努力をさらに充実させたいと思います。国際化も視野に入れ、なにより意見交換が自由に出来る場として、機関誌や大会の在り方の一層の工夫をします。第3に、遺伝を学ぶ事の意義や面白さを小中学生に伝える活動をいろいろな手法を使って継続的に進めたいと考えております。子ども達の遺伝学的思考力や判断力、想像力を育成することが、また、この子達が社会人となっても一生しっかり身についていることになる教育でありたいと考えます。おりしも遺伝上の親を知る権利がオランダで容認されたと報じられています。非配偶者間人工授精で出生した子どもには10歳前後からきちんと説明する配慮が望まれています。広く、遺伝学は生命倫理を考えるうえで大切な基礎学問となっていることを忘れてはならないと思います。生命の大切さ、人間の尊厳についての私たちの日頃の思いを確かにするためにも、遺伝学を豊に伝えて行きたいものです。遺伝学と社会を考えますときに、学術的成果を解説するような一方的な活動のみでは足りが難しく、市民と情報の共有も困難であることが分かって参りました。そこで最後に、遺伝学者コミュニティ会員と一般社会人、行政関係者が同じテーブルを囲んで遺伝学的諸問題を同じ目線で話しあえる常設機構（プロジェクト）が必要とかねてより考えています。その実現を図るためにも遺伝学者が分散している諸学会のコンソーシアムを呼びかけたいとも思っております。実現は困難かもしれませんが、研究者の信頼を得る遠くて確かな道と考えます。

(学会ホームページ掲載を一部改変)

⁽¹⁾ 遺伝学雑誌第15巻第6号368-374。1939年12月 この別刷りのコピーをご希望の方はご連絡下さい。

マディソン留学の思い出

岡山大学 資源生物科学研究所 長岐 清孝



長岐清孝と Jiang 博士。Nature genetics への掲載を祝うパーティーを前にして。Horticulture ビルディング 1 階にある植物園にて

PB 賞のために送ったマディソン留学時の写真が、石和会長の目にとまり、会長から「楽しい留学生活だったようですね。体験記を書いてみてはいかがですか？」とお言葉をいただき、今回このような体験記を書くことになりました。約 3 年間、ポスドクとしてウィスコンシン大学の Jiang 博士の下で、植物の動原体について研究をしたときのことを、この先、このような機会が訪れるであろう若い研究者の方々の参考になればと思い、書き連ねました。

それは、突然訪れました。以前、シンポジウムで講演していただいた

Jiang 博士から、「うちで、ポスドクとして研究してみないか？」というメールが届いたのです。そのときすでに私は、助手として働いていました。先方の「最低 2 年間いなければサイエンスはできない」という要求を満たすためには、職を辞して行くことになるので、悩みましたが、留学を決意しました。

まず、ウィスコンシンで研究を始めて思ったのは、「空気が違う」ということでした。そこには、頂点を見つめる張りつめたメジャーの臭いが漂っていました。その臭いを感じた瞬間、「私の選択は、間違っていなかった」と思いました。

しかし、ボスと呼ばれる形で行ったものの、私の研究の定位置が確保されていた訳ではなく、他のポスドクがギブアップした「トウモロコシ動原体由来の BAC 解析」が私の最初のテーマでした。今思えば、これはテスト登板の様なもので、この研究を通して、ボスは、私の研究能力を確認していたのだと思います。この研究が、順調に進み論文になった頃には、私のアイデアにボスは 2 つ返事で OK を出してくれるようになっていました。

そして、テスト登板が終了すると、今度は私がどんな新しいものを生み出せるのかをボスは探ってきました。この辺が、アメリカのボスのどん欲なところでもあり、アメリカで研究が進む理由のひとつでもあると思います。ボスは、各人の能力を把握し、できるだけ効率よく目的の研究が進むように内外問わずに共同研究をコーディネートします。このボスとのディスカッションの中で生まれてきたのが「クロマチン免疫沈降による、シロイヌナズナ動原体の機能配列の解析」でした。これまで行ったことのない蛋白質を扱う研究を立ち上げるのにひと苦労しましたが、何とかやり遂げることができました。

そしてついに、大役が回ってきました。高等真核生物の動原体というのは、反復配列のジャングルで、この領域は、ゲノムプロジェクトでも読み飛ばされてしまうような解析困難な領域でした。しかし、我々のグループでは、イネの第 8 染色体がそれほど反復配列を含んでいないことを見つけ、その塩基配列の完全解読に挑んでいました。他のポスドクが、その領域をカバーする BAC コンテグを作成し、共同研究者たちによりその配列が着々と決定されているところでした。また、同時に他の共

同研究者達により、イネの動原体蛋白質に対する抗体も作成されました。「ここから先の解析は、お前に任せる」、クローザーが私に回ってきたのです。最初は、プレッシャーでしたが、今まで身につけてきた解析方法を駆使して、この動原体を解析していくうちに、それは喜びに変わりました。予期せぬ結果が、次々と飛び出してきたからです。機能領域が、これまで言われていた反復配列以外の配列を多く含むこと、これまで動原体領域には無いと言われていた活性のある遺伝子が、多数存在していること、そして、その活性を維持するための巧みなクロマチン修飾の配置。「世界の誰も知らない現象を今みている」この感動を味わいながら、最後まで走り抜けました。結局、この結果は、Nature Genetics 誌に掲載されましたが、そのことよりもあの感動を仲間と分かち合えたことが、良い思い出です。

この様に駆け抜けてきた私のマディソン生活も終わりを迎えるときがやってきました。岡山大学に助手として着任したからです。ボスは、「お前がイヤになるまで、いつまでいてくれてもいい」と言ってくれていたのですが、今度は監督として自分で作った日本のチームである感動を味わいたく思い、帰国を決意しました。この夢は、まだ途中ですが、いつか叶えようと思っています。

最後に、この文章が、少しでも刺激になり、若い研究者が感動を覚えながら新発見をし、日本の科学を発展させてくれることを願います。

参考文献

- Nagaki K, Cheng Z, Ouyang S, Talbert PB, Kim M, Jones KM, Henikoff S, Buell CR, Jiang J (2004) Sequencing of a rice centromere uncovers active genes. Nat Genet 36: 138–145. Epub 2004 Jan 2011.
- Nagaki K, Song J, Stuper RM, Parokonny AS, Yuan Q, Ouyang S, Liu J, Hsiao J, Jones KM, Dawe RK, Buell CR, Jiang J (2003) Molecular and cytological analyses of large tracks of centromeric DNA reveal the structure and evolutionary dynamics of maize centromeres. Genetics 163: 759–770.
- Nagaki K, Talbert PB, Zhong CX, Dawe RK, Henikoff S, Jiang J (2003) Chromatin Immunoprecipitation Reveals That the 180-bp Satellite Repeat Is the Key Functional DNA Element of Arabidopsis thaliana Centromeres. Genetics 163: 1221–1225.

神奈川科学技術アカデミー教育講座受講生募集

シグナル伝達と疾患コース＜新規開講＞ ～シグナル伝達の異常と各種疾患発症の因果関係～

■カリキュラム編成者

東京都臨床医学総合研究所研究統括顧問 医学博士 新井 賢一
東京大学医科学研究所 教授 医学博士 北村 俊雄
東京大学医科学研究所 所長 理学博士 山本 雅

■コースの特色・ねらい

最近の研究の目覚ましい進歩により、シグナル伝達分子を標的とした薬剤を理論的かつ効率よく開発することが可能になりつつあります。それぞれの分野の専門家に主に以下の2点について分かりやすく解説していただき、新しい分子標的療法の開発へのヒントが得られるような場を提供いたします。

- 1) シグナル伝達系に起こるさまざまな破綻が生体に引き起こす病的状態について。
- 2) さまざまな疾患における治療標的となりうる分子の解説。分子標的薬剤が既に開発されている場合はその紹介と今後の課題。まだ、開発されていない疾患に関しては、分子標的となりうる分子について。

■講義日 H17. 3/2 3/3 3/10 3/23 計4日間 ※1日単位の受講可

■主なカリキュラム内容

【シグナル伝達の総論、方法論、疾患との関連】（シグナル伝達の分子生物学／TOF/MASによるシグナル伝達系の解析／MAPキナーゼと疾患）

【免疫・血液とシグナル伝達】（結核菌ペプチドによる免疫制御／自然免疫と自己免疫疾患／白血病細胞のシグナル伝達と創薬ターゲット）

【成人病・癌とシグナル伝達】（糖尿病とシグナル伝達／癌と細胞周期／虚血のシグナル伝達）

【幹細胞・神経とシグナル伝達】（幹細胞制御のシグナル伝達と分子標的／蛋白質分解のシグナル伝達と神経変性疾患／造血幹細胞のシグナル伝達と造血）

■講義 東京大学医科学研究所（東京都港区白金台）

■受講料と講義日

一般 56,000円 KAST 法人賛助会員（事業所単位）・神奈川県内中小企業 44,800円

1日単位の受講 18,000円

■申込締切日 平成17年2月9日(水) ■募集人員 25名

21世紀 COE 特別セミナー



演 者 : **James F. Crow** 名誉教授
Department of Genetics
University of Wisconsin-Madison
日本遺伝学会外国名誉会員

演 題 : **Age and sex effects on human mutation rates:
an old problem with new complexities**

日 時 : 2005年 3 月22日 (火) 15 : 00~16 : 30

場 所 : 東京大学理学部 2 号館 4 階講堂

Abstract:

It has been known for many decades that the mutation rate is higher in human males than in females and increases with paternal age. The main explanation is the greater number of cell divisions prior to sperm formation than prior to egg formation, and the older the male the more cell divisions. This is true for base-substitution mutations, but small deletions are roughly equally frequent in the two sexes. For any particular gene the sex and age dependence depend on the ratio of mutations that are base-substitutions to those that are deletions.

There are, however, at least three loci at which practically all mutations are paternal. In each of these the mutations occur at one or a small number of nucleotides. Recently it has been possible to measure the mutation rate by examination of individual sperms. One hypothesis for the high rate is that there is selection among the spermatogonial cells favoring the mutations, which causes the appearance of a high mutation rate. The evidence for this hypothesis will be presented.

世話人 : 青木健一 (内24485)

(注) 当日のプログラムについて、多少の変更があるかも知れません。事前に関係者にお問合せいただければ幸いです。(青木)

新2か年計画の布石——2005年日本遺伝学会第1回幹事会から

日 時： 2005年1月22日（土）13：10～16：40

場 所： 国立遺伝学研究所会議室

出席者： 石和 貞男，田嶋 文生，斎藤 成也，品川日出夫，遠藤 隆，城石 俊彦，五條堀 孝
（第77回大会委員長），鈴木真有美（記録係）

メール参加： 福井 希一，高畑 尚之

1. 石和会長より挨拶及び幹事，第77回大会委員長の紹介。

昨年度末に新旧幹事の引き継ぎ会を行わなかったもので，関係者間でそれぞれ進めることとした。

本幹事会では，各幹事が今年度に計画を予定している所轄事項を中心に報告し，自由に意見交換をすることとした。なお，今春の第1回評議員会（後に4月4日と決定した）に諮るべき議題として今後さらに具体的に詰める機会（メールなどにより）を考える。なお新任幹事からは，会員向けに挨拶記事を寄稿する事になった。

2. 庶務幹事（田嶋 文生）

— 規約，申し合わせなどの点検，整備を行う。

「会長および評議員選挙に関するおぼえがき」，「学会賞および奨励賞に関する規程等」などについてその運用が会員にとって明確になるよう改善する。改訂案文ならびにその審議手続きについては案が出き次第幹事会に提出する。

3. 会計幹事（斎藤 成也）

— 2004年度収支概要の報告。特に問題なし。

— 決算報告外資金，木原基金について現状と今後の在り方について意見交換をした。この事については，継続して検討する事にした。

— 学会事務センター破綻後の経過報告（メディ・イシューとの契約について），いまだし事態を見守る必要あり。

— 新年度の会計監査として荒木 弘之会員，大田 竜也会員を推薦。了承。

— 学会のホームページについて現状を説明。

4. 編集長・編集幹事（品川 日出夫，遠藤 隆）

— 2004年度編集状況の報告。電子投稿にして海外からの投稿数が増加したが，編集委員には GGS 論文の質を維持するよう注意深い審査をお願いした。なお，最新の採択率は67%。（品川）

— GGS PRIZE を本年度から選定して授与する。2004年度の発表論文の中から選定するために，まず編集委員・編集顧問は候補論文2報以内を5月31日までに編集長宛に推薦する。編集長は推薦を受けた論文を編集委員全員に知らせ候補論文の評価を依頼する。推薦者は編集委員会で推薦理由を説明，その後討論を経て採否を多数決で決める。より詳細な候補選考過程や選考基準については，引き続き遠藤新編集長のもとで検討することをお願いした。（品川）

— 編集委員の任期については，次回編集委員会で2年程度とする旨口頭にて説明する。（遠藤）

— 品川幹事が Vol. 80（2005年度）No. 1 までの編集を担当して，No. 2（April）からは遠藤新編集長に引き継ぐこととなった。第80巻の GGS の表紙は二人で相談のうえ同じ図案で濃紺のカラーとすることにした。しかし，表紙のデザインについては今後検討課題としたい旨遠藤氏から発言があった。（品川）

— 品川先生から現編集委員に編集長（編集幹事）変更について連絡していただき，編集事務を円滑に進めて行きたい。（遠藤）
品川先生には，今年度から特別幹事として幹事会にとどまって頂き，長年学会誌編集のレベルアップに貢献されて来た経験を折りに触れ後任幹事に引き継いで頂く。また編集業務だけでなく学会の在り方についても，アドバイスをお願いしたいので，特別幹事を新たに幹事会に設置，その任に当たって頂く事にした。（石和）

— 電子投稿のシステムのみならず，電子審査システムの導入にも関心がある。（遠藤）

— 英文校閲については編集委員と改善を図りたい。（遠藤）



- 遠藤編集長のメールアドレス ggsiden@kais.kyoto-u.ac.jp
- 5. 企画・集会幹事（城石 俊彦）
 - 第79, 80回大会の大会開催地候補を募りたい。春の評議員会で関心を高める努力をする。
 - 今年度の BP 賞について、引き継ぎを行う。（田嶋先生、河野先生）
- 6. 第77回大会委員長（五條堀 孝）

大会ニュースその1がまとまったので、詳しい内容はその原稿を参照願いたい。また、学会のホームページでも随時最新の準備状況を見ることが出来る。

今後はなるべく早く大会専用のホームページを大阪大会の例にならって立ち上げ、大会参加申し込みなどの周知徹底を図りたい。

 - 本大会のテーマを「生命現象の統合的理解としての遺伝学」とし、広報活動を展開する。とくにプログラムに配慮して、異分野の研究者を呼び込む努力をしたい。

大阪大会に準じて学生援助を行いたい。発表する学生は参加費を無料とすることや旅費援助を学会本部の支援を受けて行う予定。東京に会場を設定したのも全国からアクセスしやすく、学生にも便利であると考えたからである。

 - 会期は 9 月 27 日(火)～9 月 29 日(木)、ただし 26 日は各種役員会があり、前夜祭としての集会も検討している。

国立オリンピック記念青少年記念センターにて開催

準備委員会メンバーの紹介とさらに詳細な準備状況の説明を行った。
- 7. 渉外庶務幹事（福井）
 - 国際遺伝学会議のわが国での開催の可能性について、関係者と相談して検討を早急にしたい。特にシドニー大会で会計幹事を担当された館野会員とよく連絡をとりたい。1988年に第12回国際遺伝学会議（12 th, ICG）が当時の木原均会長のもとで品川で開催された。これから何年先になるか分からないが、次世代の研究者への期待を込めて私たちは真剣に取り組みたい。そのためには、遺伝学関連学会連合（仮名）設立をよびかけて、準備会を組織することも視野に入れることを考える。またこの連合体は、他の国内外の活動拠点になりうると思われる。
- 8. 将来計画幹事（高畑）



昨秋の大阪大会総会で報告したわが国の遺伝学的研究の最前線をレビューする学術図書出版計画については、現在ある出版社と検討中であるがその実現性については必ずしも樂觀できない。もうすこし時間をかけてみたい。

- 遺伝学懇談会（月例）の定期的開催を検討している。遺伝学会主催としたいので、評議員会にて審議了承を求める。
- 懇談会開催の趣旨：一世紀以上にわたる遺伝学の歴史を踏まえ、これからの遺伝学教育、研究、および社会との関わりについて自由闊達な意見交換を行う。具体的なプランをまとめて、先ず幹事会に検討を依頼する。懇談の進行にともなう派生的にいろいろな専門的プロジェクトが発展することを期待している。また、一年間の懇談会の討議結果をまとめる事によって、これからの遺伝学について示唆に満ちた出版物を刊行する。

- 9. 協力委員会の新年度委員の推薦

自然史学会連合委員	館野 義男会員
生物科学学会連合委員	城石 俊彦会員
同位元素協会委員	蓮沼 仰嗣会員

10. 当面の事務日程について

- 学会賞選考委員会委員の選出（評議員に依頼）、研究助成金等推薦調査委員会委員の選出（評議員に依頼）
- 第1回評議員会開催（2003年度にならって4月初旬）
- 2005年度会計監査員承認手続き

以上

◆ 幹事会を終えて ◆

短い時間であったが談論風発楽しい会議であった。

今回の幹事会で話題になった企画を列挙してみると①国際遺伝学会議の誘致②遺伝学をキーワードにした学会連合体の結成③遺伝学懇談会（定例）と成果の出版④第1回論文賞選考スタート⑤第4回 BP 賞などがあった。

時間の関係で話題に出せなかったが、石和が検討中の活動計画を今後さらに具体化し、いずれかの評議員会にて審議をお願いする。

⑥遺伝学会会員のネットワークの作成。研究室の列島地図としてもよい。どのような専門分野をもつ研究・教育者が各地に分散しているか知り、相互のコミュニケーションを促進。諸問題について会員レベルの意見分布を得ることが出来る。メールアドレスの届け出をさらに会員に呼びかける。

⑦「E-質問コーナー」の門戸をホームページを活用して一般社会に開きたい。⑥に登録された会員から協力者を求める。

⑧遺伝学会会則にある本学会の目的の一つ「遺伝学の普及」を促進するための特別委員会を設置して、現在の社会状況に必要な教育・普及活動を研究し、かつ実践活動をする。生命倫理、絵本出版、基本教科書などの作成など。そのための委員会内規をつくり委員長は会長が指名する。若干名からなる委員は委員長が会員から任命する事が出来る。

⑨アウトリーチ事業（文科省）に参加するための学会窓口を設置する。対象は広い。企業、大学、幼・小・中・高などが考えられる。例：小学校高学年／中学校低学年に焦点を絞り、遺伝教育の在り方を現場の教育者と検討する。

=====（石和記）

新任幹事の挨拶

遠藤 隆

京都大学農学研究科の遠藤隆です。この度、品川日出夫 GGS 編集幹事の後を引き継ぎ、第80巻より編集を担当（編集長と称するようです）致すことになりました。これまで GGS の編集委員、編集顧問を務めてまいりましたが、編集の責任者になることには若干の不安を感じております。品川先生のご努力により、GGS は雑誌記事や投稿が電子化され、投稿数も増え、順調に発展して来ました。今後は、審査の電子化、雑誌体裁の改定、そして、何よりも内容の充実を図らねばならないと存じております。今しばらくは、品川先生のご指導、ご支援を仰ぎながら編集作業に慣れて行きたいと存じます。なお、今年の4月以降には、品川先生より GGS の事務を完全に引き継ぎますので、GGS の投稿、審査に関する連絡は下記にお願い申し上げます。

E-mail: ggsiden@kais.kyoto-u.ac.jp

(GGS 関係以外の連絡は、trendo@kais.kyoto-u.ac.jp でお願いします)

Fax: 075-753-6486

Tel: 075-753-6137

郵便: 606-8502 京都市左京区北白川追分町

京都大学農学研究科応用生物科学専攻 植物遺伝学分野

遠藤 隆

以上、遺伝学会員皆様のご支援、ご協力を宜しくお願い申し上げます。

福井 希一



学会は当該分野における学术交流のためのフォーラムであり、時には世に対して学会としての見解を披露することもある、いわばその国における当該学術分野を代表し取りまとめる機関でもあるだろう。

多くの人たちにとって遺伝や遺伝学はいつの時代でも生物学分野ではもっとも関心の高い分野の一つであることは疑いを得ない。事実、昨年末の分子生物学会での生物教育のWSでは高校生の関心の高いトピックスは遺伝子、DNA、エイズ、プリオン、バイオテクノロジーとの報告があり、いずれも遺伝学が直接、間接にかかわるものばかりである。

こうした多くの人たちの関心の高さにまた学会員自身の興味や関心の置き所に現在の遺伝学会が必ずしも十分に答えきれていないところや学会長の石和先生を初めとして多くの学会員の共通する想いでもあろう。またそれを何とかしたいと言う石和先生のお考えも常々伺っている。

学会はその情報量と質により位置づけられる。具体的には、前者で言えば会員数と大会での演題数さらには学会誌の投稿数、後者で言えば学会誌の IF（インパクトファクターの是非については議論のあるところではあるが）、演題やシンポジウムの質であろう。またどのような研究が発表されているかと言う学問分野での流行り廃りも大きな影響をもっている。多くの学会が会員数の減少や沈滞化を問題にしている一方で進化学会やタンパク質科学学会が生まれそれなりの存在感を示しているのはその例でもあろう。また学問の発展に学会がどう対応しているか言うことも重要な要因であろう。こうした中で遺伝学会が今後どういう位置づけられるのが問題となっている。

古くからの遺伝学会員としては今更ながらのことを書き連ねたと言う思いもあるが、さらに月並みな言葉を許していただければやれることは頑張ったいと思っている。そして何をやるかは学会構成員の考えに基づくので、会員諸氏のご示唆ご協力を切にお願いするしだいである。

品川 日出夫

前期迄編集幹事として、長い間 GGS 編集を担当させて頂いておりましたが、遠藤隆先生に2005年度より交代することになりました。スムーズな引き継ぎとやり残した GGS の電子化の完成等で遠藤先生のお手伝いも含めて、特別幹事（無任所）として、しばらく石和会長を支えていきたいと思ひます。昨年は遺伝学会大会のお世話と、学会の2大行事のお世話をさせて頂きました。大会に学生会員が沢山参加して研究発表をし、新会員がこの大会を契機に多数入会してくれました。一般講演を重視して、口頭発表に十分時間をさき、BP 賞も定着して、遺伝学会大会が若い研究者にとって魅力ある学会として認識されて来た結果と思ひます。遺伝学会は絶えず改革をおこなって、若い会員、特に学生会員を大切にサポートして来た成果だと思ひます。このトレンドが定着して今後の学会の発展に結びつくようになることを願っています。今年は GGS に発表された論文の中から優れた論文に GGS Prize を授与する最初の年です。是非いい論文のご推薦をいただき、GGS をさらに魅力的な学術雑誌にするために、会員の皆様のご協力をお願い致します。

第3回 男女共同参画シンポジウム 記録

女性研究者がPI(研究グループのリーダー)になるには?

——「ガラスの天井」はどこにあるのか——

年会4日め(12月11日)13:15-15:30 神戸国際会議場(5階H会場)

企画 日本分子生物学会男女共同参画ワーキンググループ

趣 旨

男女共同参画問題には非常に多様な側面があり、短時間のシンポジウムで全てを総花的に扱ったのでは、深い議論は難しい。そこで本年会では毎回テーマを絞った企画を試み、昨年は育児支援の問題を取り上げた。今回は、独立した研究グループを率いるリーダーである、いわゆるPI(ピーアイ、Principal Investigatorの略)のポジションに女性が少ないという問題を取り上げる。

現在分子生物学の分野では、学部~ポストドクの階層では女性の比率は3割近くに達している。しかし助手・助教授・教授と階層が上がるにつれ、女性比率は大きく低下する。研究所等でも研究員には女性が多いが、研究室長やプロジェクトリーダーには女性が少ない。上級研究職への採用や昇任に際して、あからさまな女性差別規定が存在するわけではなく、女性を意図的に排除する意識も現在では少なくなっている。このように制度的には開かれていて上が見えているはずなのににもかかわらず、実際には目に見えない障壁がある状況を「ガラスの天井」と言う。

出産・育児に時間を取られることが女性にとってハンディキャップになっているのは明らかであり、育児支援の必要性は言うまでもない。しかしガラスの天井は子供がいる女性に限った問題ではない。育児支援制度の充実と平行して、それ以外の面にも女性PIの増加を阻害している要因がないのか、制度と意識の両面から問題点を発掘し、現状を変えてゆく必要がある。今回の議論が上級研究職をめざす女性研究者への具体的アドバイスにもなれば幸いである。

プログラム

会長挨拶

山本 正幸(東大・理:教授)

学協会アンケートからわかる分子生物学会会員の実態

赤林 英夫(慶応大・経:助教授)・

木村 洋子(都臨床研:独立研究員)

女性のPIはなぜ少ないのか?

——表にでてこない本音の声——

伊藤 啓(東大・分生研:助教授)

PIになってみて思うこと

森 郁恵(名古屋大・理:助教授)

あなたは自分のラボを持ちたいですか?

大隅 典子(東北大・医:教授)

Work hard! Work hard! Work hard! ...and dream big.

——ガラスの天井を突き破るには——

杉浦 麗子(近畿大・薬:教授、

神戸大・医:客員教授)

男性が真の自己実現をしやすい社会こそ、男女共同参画への道

——男性へのアフターマティブアクションの勧め——

糸 昭苑(熊本大・発生医学
研究センター:教授)

The Science of Scientist Recruitment

広海 健(遺伝研、総研大・
遺伝学:教授)

要 旨

学協会アンケートからわかる分子生物学会会員の実態

赤林 英夫(慶応大・経:助教授)・

木村 洋子(都臨床研:独立研究員)

昨年、「男女共同参画・学協会連絡会」が主催し、40あまりの学会で研究者の生活、研究状況などに関するアンケートがおこなわれました。その全体の結果はすでにまとめられ、文部科学省に報告書を提出するとともに、WEB公開もされています(分子生物学会ホームページの男女共同参画コーナーよりリンクされています)。その後、各学会にそれぞれのデータが返されて、各学会レベルで解析が進められています。分子生物学会でも本学会の解析をすすめてきました。このアンケートから浮かびあがる本学会の実態、特に期限付き常勤職の割合の多い実態が、どのように研究者の生活に影響を与えているかを報告します。

女性のPIはなぜ少ないのか?

——表にでてこない本音の声——

伊藤 啓(東大・分生研:助教授)

現実問題として女性のPIは多くありませんが、その理由についてPIを選ぶ立場の人はどのように考えているのでしょうか?人事選考の際、具体的にどのような点が評価の対象になるのか?女性が応募した場合、選考過程でどういう点が不利と見なされることがあるのか?女性が少ない理由は率直に言ってどこにあると思うのか?若手研究者を指導する過程で、男女に差を付けている面はないか?等々、微妙で守秘義務が絡む人事に関する問題であるだけに、責任のある立場にある人ほど、公の場で意見を述べることは容易でないと想像されます。そこで人事選考に関わる立場にあるような上級職の研究者(男性・女性)に、匿名を条件で本音の意見を聞き取り調査し、それを整理して分析してみます。

PIになってみて思うこと

森 郁恵(名古屋大・理:助教授)

女性研究者のPIは、なぜ少ないと思いますか。こう最初に質問された時は、何も思いつきませんでした。気がついてみたら、PIになっていたというのが自己認識でしたから。考えをめぐらせてみると、キーボ

イントが、いくつかあるように思います。リーダーシップが取れるかどうか、ということは、非常に重要なポイントです。リーダーとしてのやり方は、多種多様だと思いますが、決め手となるのは、最終判断をするのはPIである自分という自覚がもてるか。自分が決断したことから派生する一切の出来事について全責任を取る覚悟があるか。PIの立場から、きちんと意見を言い、適切な行動を取る勇気があるか。それらの能力が備わっていても、それをアピールし、実践にうつせる機会が限られているのであれば、現在の雇用システムを改善していくなどの必要性があるでしょう。わたしが理想とする「優れたPI」とは、優秀な人材が集う活気あふれるラボを主宰し、ラボメンバーを信頼し信頼される関係にあって、一緒に切磋琢磨しながら、研究の楽しさや醍醐味を、若い研究者（あるいは、その前段階にいる学生）に伝えることが出来る人です。そのために、一番大事なことは、「優れた研究を遂行し、世界へ発信する科学者」であり続けることだと思っています。理想論に終わらせないことが、目の下目標です。

あなたは自分のラボを持ちたいですか？

大隅 典子（東北大・医：教授）

東北大学に赴任することが決まった頃、ある女性研究者から「どうしたら女性でもPIになれるか？」という質問を受けて、正直面食らいました。その方は、自分は実力があるのに女性である為に損をしている、という風に感じているようでしたが、そもそもそういう質問をする人は、あまりPIには向いていないと思います。科学者にとってPIになることは最大関心事でも最終目標でもないのですが、PIに必要な資質は単に研究ができるということだけではありません。また良い子にしていたら、PIのポジションが向こうからやってくるということはありません。そしてPIになるということは、それ相応の覚悟と責任のいることです。私自身は大学院から助手になったときくらいから漠然と自分のラボを持ちたいと思うようになり（助手にならなかったらそう思わなかったでしょうが）、自分の教授のラボ運営スタイルを横で見っていました。いい面、これは自分だったら変えたいという面、いろいろありました。中間管理職をしながら自分の研究をし、さらにキャリア・アップのために様々な経験を積みました。このワークショップでお話することが、（女性か男性かを問わず）PIを目指す人たちに参考になればと思います。

Work hard! Work hard! Work hard! ...and dream big.

——ガラスの天井を突き破るには——

杉浦 麗子（近畿大・薬：教授、神戸大・医：客員教授）

タイトルにある＜ガラスの天井＞なるものを私は意識したことがない。ひたすらがむしゃらに人生を闘って、自分のやりたいことに己の持てるエネルギーの全てを注ぎ、気がついたらガラスの天井を突き破ってい

たというのが正直なところである。したがって、私の経験がPIをめざす女性にとつての「就職必勝法セミナー」になるかどうか、はなはだ疑問である。

しかしながら、あえて私の今までの半生から＜女性が研究者として成功するための秘訣＞というのをあげるとすれば、Work hard! ...and dream big. に尽きると思う。それにもまして重要であったのは、私をgenderにとらわれることなく行動し、自己主張できるように教育してくれた両親、そして自分でも気がつかなかった才能を引き出して指導していただいた研究上の恩師の存在である。私の波瀾万丈の人生談が女性研究者にとって勇気を与えることができれば幸いです。

男性が真の自己実現をしやすい社会こそ、男女共同参画への道

——男性へのアフーマティブアクションの勧め——
糸 昭苑（熊本大・発生医学研究センター：教授）

大学院生の時に長男が生まれてから14年間、子育てをしながら、自分のやりたいことに正直に、その時々を選択できる道を選んで進んできた結果、現在の自分があるというのが、本当の気持ちです。夫の協力もあったので、子育てをしながら研究を続けることは、自分にとっては、バランスの取れた生き方でした。しかし、日本の社会は、女性に対して以上に、男性が子育てをするために、優しくしない社会だということを、夫ともども実感してきました。研究者に限らず、社会全体で、育児における父親不在という現象に、大きな危機感を持ちます。

男女差別をなくそう、という時に、これまでは男性研究者の現状に、女性研究者を並べることを、みなさんは主に考えてきたと思います。しかし、従来の男性中心の仕事（成果）優先主義に、今後の社会を合わせていくよりも、過労働で家庭生活や、仕事以外の楽しみを切り詰めている現状を見直して、特に男性が、子育てを含む、仕事以外の社会貢献に参加しやすい環境を作ることが、私には望ましく感じられます。すなわち、男性に対してこそ、アフーマティブアクションをしていくことによって、男女の両方にとって、仕事（研究）のみでなく、家庭・子育て、あるいは、地域貢献・社会貢献などを通じて、多様性のある自己実現を目指しやすくなると思います。

現在のPIの皆さん、将来PIを目指す若い研究者の皆さんの中で、そのような方向の研究者社会を作ること賛成してくれる人が増えてくれれば幸いです。

The Science of Scientist Recruitment

広海 健（遺伝研、総研大・遺伝学：教授）

遺伝研は例外的に女性教員が多い——のだそうである。PI総数37人の内、8人（21.6%）が女性だが、教授会議などに出席していても「女性が多い」と実感するわけではない。しかし、余所はそうではないなら、遺伝研には何か「違い」があるはずである。内部資料の分析を通して、「遺伝研に女性教員が多い理由」の解明を試みる。

日本学術会議会長コメント

平成16年12月24日

このたび、理化学研究所の研究者による研究論文の改ざんが行われたことは、大変残念です。

日本学術会議においては、「科学における不正行為とその防止」は重要な課題であると認識しており、平成15年6月24日、学術と社会常置委員会から、その防止のための対応策についての提言を行っています。

その中で、論文の改ざん、捏造等の不正行為は科学の健全な発展を阻害し、科学に対する社会的評価を損なうだけでなく、人々の生存、生活、福祉に重大な影響を与え、基本的人権や人間の尊厳を傷付けることにもなりかねません。科学における不正行為の防止は、科学者コミュニティが社会に対する説明責任を果たし、科学者が広く国民から評価され、尊敬される社会を築くために不可欠な、科学者が自ら解決すべき実践的課題であることを明らかにしています。

この提言を踏まえ、日本学術会議は、現在、「科学者の代表」として、社会と対話しつつ科学者コミュニティ内の議論を深め、不正行為の抑止と研究上の誠実さの確保に関する具体策の策定に向け、引き続き、鋭意審議を進めているところであり、このような不正行為の再発防止に向けて、早急に提言を取りまとめまいりたいと考えています。

日本学術会議会長 黒川 清

【参考】

対外報告「科学における不正行為とその防止について」（平成15年6月24日）

——日本学術会議ニュースメールから（抜粋）——

このメールは日本学術会議から会員および研連委員にメールにて送られてきます。また日本学術会議のホームページでもご覧になれます。

■連合部会、部会の開催について

9日(水)に連合部会、部会が開催されました。

連合部会においては、第19期日本学術会議運営審議会附置科学技術基本計画レビュー委員会報告「科学技術基本計画における重要課題に関する提言」についての報告、日本の科学技術政策の戦略(仮称)(案)についての議論等を行いました。資料は、現在審議中で公開されておりません。いずれホームページに掲載される予定。前者の提言には、国としてのビジョンとミッションを明確化して重点分野を構築することが必要である。今日取り組むべき緊急かつ長期的課題は、持続可能な社会の構築にあり、特に地球環境問題が中心的課題である。基礎研究そして一国で解決できない課題等の推進には、人材導入、人材育成を含め国際連携が必要である。今後はアジアを十分に配慮した国際連携推進施策が特に重要である、などを42頁にわたって記載している。2月17日の総合科学技術会議有識者議員会合説明時に、提出されます。第3期科学技術基本計画の策定に当たり、第1期及び第2期の科学基本計画の達成効果等に関する分析・評価の結果を踏まえて独自に総合的・俯瞰的な視点から検討し、日本学術会議としての意見を取りまとめて総合科学技術会議に提出することを目的としています。(一部石和付記)

【問い合わせ先】学術課 (Tel: 03-3403-6289, s249@scj.go.jp)

■日本学術会議の事務局の再編等について

日本学術会議の10月からの新体制の発足に向けて、本年4月に日本学術会議が総務省から内閣府に移管され、7月には事務局が再編される予定となっています。

事務局の再編案については、日本学術会議ホームページをご覧ください。
(<http://www.scj.go.jp/ja/scj/arikata/pdf/saihen.pdf>)

【問い合わせ先】企画室 (Tel:03-3403-1250, houan@scj.go.jp)

■日本学術会議会員候補者選考委員会の開催等について

1月26日(水)に第7回の日本学術会議会員候補者選考委員会が開催されました。

選考委員会では、学術研究団体等からご提供いただきました会員候補者に関する情報を重要な参考情報として、今後数か月にわたり慎重に選考を進めることとしており、当日はその具体的な進め方等についての審議が行われました。

また、本委員会の開催に先立ち1月25日(火)に、選考委員とともに選考事務の一部に参画していただく91名の専門委員を黒川会長の任命により発令しました。専門委員名簿等については、日本学術会議のホームページに掲載しておりますので、ご参照ください。

(<http://www.scj.go.jp/ja/info/kouho/index.html>)

なお、昨年12月24日に締め切りました会員候補者情報については、1千を超える学術研究団体、大学、研究機関等から7千名近い膨大な候補者情報の提供をいただきました。

現在、事務局において、会員候補者選考委員会における選考のための資料の整理、基礎資料の作成作業を行っています。

【問い合わせ先】 推薦管理事務局 (Tel: 03-3403-1801, as258@scj.go.jp)

■日本学術会議の新しい体制の在り方に関する懇談会の開催について

1月24日(月)に第4回の日本学術会議の新しい体制の在り方に関する懇談会が開催され、国際交流活動の在り方、政策提言機能発揮の在り方について議論されました。

懇談会の資料等は、日本学術会議のホームページに掲載しておりますので、ご覧ください。

(<http://www.scj.go.jp/ja/scj/kondan/index.html>)

また、予てより黒川会長から総会、運営審議会等において会員の皆さまにお伝えしておりますように、また、既に部としての意見をお出しいただいている部等もございますが、日本学術会議の新体制に関するご意見等がございましたら、部及び常置委員会において取りまとめいただいた上、会長宛提出いただきますようお願いいたします。

なお、2005年1月号の「学術の動向」に、「学術会議は考える」と題し、黒川会長、戒能、岸両副会長が、新しい学術会議への課題等についての論文を寄稿されておりますので、併せてご一読ください。

【問い合わせ先】 企画室 (Tel:03-3403-1250, houan@scj.go.jp)

第5回(平成17年度) 財団法人材料科学技術振興財団山崎貞一賞候補者募集

1. 授賞対象分野

(1)「材料」 (2)「半導体及び半導体装置」 (3)「計測評価」 (4)「バイオサイエンス・バイオテクノロジー」

2. 授賞対象者： 詳しくは下記の請求先へお問い合わせ下さるか、URLをご覧ください。

(1) 授賞対象は、論文の発表、特許の取得、方法・技術の開発等を通じて、実用的効果につながる優れた創造的業績をあげ、かつ／もしくは、今後そのような業績をあげる可能性が高い将来性のある人(複数人も可)とします。

(2) 受賞候補者の国籍は問わず、日本国内において業績をあげた人を授賞対象とします。

(3) 過去に応募されたことのある人でも再応募可能です。

3. 顕彰： 各分野それぞれに賞状及び副賞(メダル・賞金300万円)を贈呈します。

4. 募集期間： 平成17年2月1日から4月末日必着

5. 推薦書請求先、提出先：

〒157-0067 東京都世田谷区喜多見1-18-6

財団法人材料科学技術振興財団 山崎貞一賞事務局

TEL: 03-3415-2200 E-mail prize@mst.or.jp

FAX: 03-3415-5987 URL <http://www.mst.or.jp/prize/>

日本学術会議会員候補者選考委員会専門委員名簿

氏 名	所 属	氏 名	所 属
青木 利晴	(株) NTT データ取締役相談役	田 隅 三生	埼玉大学学長
秋元 肇	海洋開発機構地球環境フロンティア研究センター	只木 良也	(株)ブラック研究所生熊研究センター長
浅島 誠	東京大学大学院総合文化研究科生命系研究科長	田中 一宜	産業技術総合研究所理事
新井 民夫	東京大学大学院工学系研究科精密機械工学専攻教授	鎮西 清高	京都大学名誉教授
生駒 俊明	科学技術振興機構 研究開発戦略センター長	寺崎 昌男	立教学院本部調査役
石塚 満	東京大学大学院情報理工学系研究科電子情報学専攻教授	戸塚 洋二	高エネルギー加速器研究機構機構長
一番ヶ瀬康子	長崎純心大学人文学部教授	外村 彰	(株)日立製作所フェロー
伊藤 早苗	九州大学応用力学研究所教授	富浦 梓	東京工業大学監事
伊藤 操子	京都大学大学院農学研究科教授	中島 秀之	公立はこだて未来大学学長
井上 祥平	東京理科大学工学部教授	中谷 英明	東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所教授
内野 健一	九州大学工学部地球環境工学科教授	中西 友子	東京大学大学院農学生命科学研究科教授
大塚 榮子	北海道大学監事	中野 勲	神戸学院大学経営学部教授
大橋 秀雄	工学院大学理事長	中野 三敏	福岡大学人文学部教授
尾形 悦郎	(財)癌研究会附属病院名誉院長	成田 孝三	大阪商業大学経済学部教授
小澤 和恵	(財)肝臓疾患医療研究財団理事長	西田 利貞	(財)日本モンキーセンター所長
小田 忠雄	東北大学名誉教授	西田 睦	東京大学海洋研究所教授
加護野忠男	神戸大学経営学部教授	野家 啓一	東北大学大学院文学研究科教授・科長・文学部長
片岡 曉夫	國士館大学体育学部教授	原 ひろ子	放送大学教授
狩野 博幸	京都国立博物館文化資料課長	原島 文雄	東京電機大学学長
岸 玲子	北海道大学大学院医学研究科予防医学講座公衆衛生学分野教授	原田 範行	杏林大学外国語学部教授
北野 宏明	(株)ソニーコンピュータサイエンス研究所取締役副所長	尾藤 正英	日本学士院会員
木下 富雄	甲子園大学学長	日向 康吉	(財)若手生物工学研究センター所長・副理事長
木村 茂行	(社)未踏科学技術協会理事長	福田 裕穂	東京大学大学院理学系研究科生物科学専攻教授
熊谷 英彦	石川県農業短期大学教授	福山 秀敏	東北大学金属材料研究所材料科学国際フロンティアセンター長・教授
氣多 雅子	京都大学大学院文学研究科教授	藤原 昇	福岡女子短期大学客員教授
郷 通子	長浜バイオ大学バイオサイエンス学部教授・学部長	古田 勝久	東京電機大学理工学部教授・理事
河野 綱果	麗澤大学国際経済学部教授	本位田真一	国立情報学研究所研究主幹・教授
河野 長	岡山大学固体地球研究センター教授	松尾 稔	(財)科学技術交流財団理事長
後藤 滋樹	早稲田大学理工学部教授	松下 温	東京工科大学コンピュータサイエンス学部長
小原 雄治	国立遺伝学研究所長	丸山 利輔	石川県農業短期大学学長
小宮山 宏	東京大学理事・副学長	丸山 正樹	京都大学大学院理学研究科数学教室教授
小山 健夫	(株)日本海洋科学技術研究所代表	三谷太一郎	成蹊大学法学部特別任用教授
近藤 潤子	天使大学学長	宮原 秀夫	大阪大学総長
櫛 佳之	理化学研究所ゲノム科学総合研究センター長	村松 岐夫	学習院大学法学部教授
佐藤 勝彦	東京大学大学院理学系研究科教授	毛里 和子	早稲田大学政治経済学部教授
猿田 享男	慶應義塾大学医学部常任理事・教授	森 欣司	東京工業大学大学院情報理工学研究科教授
重定南奈子	奈良女子大学理事・同大学副学長	矢川 元基	東洋大学工学部教授
水田 祥代	九州大学病院院長	八木 宏典	東京大学大学院農学生命科学研究科教授
須賀 唯知	東京大学工学系研究科精密機械工学専攻教授	柳田 敏雄	大阪大学大学院生命機能研究科教授兼同大学大学院医学系研究科教授
菅村 和夫	東北大学大学院医学系研究科免疫学分野医学研究科長	山内 脩関	西大学工学部教授
須田 立雄	埼玉医科大学ゲノム医学研究センター副所長	山地 憲治	東京大学大学院新領域創成科学研究科教授
仙田 満	東京工業大学大学院理工学研究科教授	山本 明夫	早稲田大学理工学総合研究センター顧問研究員
平 朝彦	海洋研究開発機構地球深部探査センター長	吉田 和彦	京都大学大学院文学研究科教授
高井 義美	大阪大学大学院医学系研究科生体制御医学生化学・分子生物学講座教授	吉田庄一郎	(株)ニコン取締役会長兼 CEO
高橋 義人	京都大学大学院人間・環境学研究科教授	鷲谷いづみ	東京大学大学院農学生命科学研究科教授
竹市 雅俊	理化学研究所発生・再生科学総合研究センター長		

平成17年1月25日発令
(五十音順)

千里ライフサイエンスセミナーブレインサイエンスシリーズ 第18回 「ストレスに耐える脳、耐えられない脳」

日 時： 平成17年10月14日(金) 10:00~17:10
場 所： 千里ライフサイエンスセンタービル 5階ライフホール
着 眼 点： ますます複雑化する現代社会において、うつ病・PTSD・摂食障害などのストレス関連疾患が増え続けている。とくに、わが国の年間自殺者は3万人を超え、うつ病は社会問題となっている。我々の脳はストレスとどのように闘い、またどのような条件下でそれが破綻していくのか。本セミナーでは、基礎医学・臨床医学のそれぞれの視点で、ストレス脆弱性の形成、ストレスへの適応と適応破綻の脳内分子機構についてお話いただき、ストレス関連疾患の予防と治療の戦略を考える手がかりとしたい。

コーディネーター： 大阪大学大学院医学系研究科 遠山 正彌
和歌山県立医科大学 仙波恵美子

プログラム：

1. 脳の発達とストレス脆弱性 山口大学医学部高次神経科学 中村 彰治
2. BDNFとうつ病 千葉大学大学院医学研究院精神医学 橋本 謙二
3. ストレスから疲労状態へ——疲労の脳科学 大阪市立大学大学院医学研究科システム神経科学 渡辺 恭良
4. 慢性ストレスによるうつ病の発症機序と漢方 (株)ツムラ 医薬評価研究所 溝口 和臣
5. ストレス関連障害の脳イメージング 東北大学大学院医学系研究科機能薬理学 谷内 一彦
6. PTSDの脳メカニズム 東京大学大学院医学系研究科精神医学 笠井 清登

定 員： 300名
参 加 費： 会員(大学・官公庁職員、当財団の賛助会員) 3,000円
会員 5,000円、学生 1,000円
申 込 込 込 要 領： ①氏名、勤務先、〒所在地、所属、電話および FAX 番号を明記の上、郵便、FAX または E-mail で下記宛お申し込み下さい。
②事務局より受付の通知を返送いたしますので、通知書に記載した振り込み先口座に参加費をお振り込み下さい。
③入金を確認後、通常2週間以内に領収書兼参加証をお届けいたします。
申 込 先： (財)千里ライフサイエンス振興財団ブレインサイエンス係
〒560-0082 大阪府豊中市新千里東町1-4-2
千里ライフサイエンスセンタービル 8 階
TEL: 06-6873-2001 FAX: 06-6873-2002
E-mail tkd-lsf@senri-lc.co.jp
担当：佐渡 哲夫

千里ライフサイエンスシンポジウム 「RNA 機能研究の最先端」

京都大学ウイルス研究所 教授 大野 睦人
徳島大学ゲノム機能研究センター 助教授 塩見美喜子

日 時： 平成17年2月25日(金) 10:00~17:00
場 所： 千里ライフサイエンスセンタービル 5階ライフホール
定 員： 300名
着 眼 点： セントラルドグマにおいて RNA は、遺伝子(保存性分子)とタンパク質(機能性分子)の単なる仲介物質であった。近年、複雑なゲノム情報発現ネットワーク研究が進むにつれ、その制御因子として本来 RNA が持つ重要性が次第に浮上してきている。RNA 機能出力の制御、RNA が携わる制御機構、機能性 RNA の働きに依存する生命現象等に焦点を当て、国際的レベルで研究を展開されている演者に最新の話題を提供していただく。

コーディネーター： 京都大学ウイルス研究所 教授 大野 睦人
徳島大学ゲノム機能研究センター 助教授 塩見美喜子

テーマ 講演者

生殖細胞の形成に関わる RNA

自然科学研究機構岡崎統合バイオサイエンスセンター基礎生物学研究所 教授 小林 悟
機能性 RNA における転写後修飾の役割と疾患との関係

植物における2つの RNAi 経路：RNA 分解とターゲット DNA のエピジェネティックな修飾 東京大学大学院工学系研究科化学生命工学専攻 助教授 鈴木 勉

ショウジョウバエにおける RNAi/miRNA 遺伝子発現抑制機構の作用機序 奈良先端科学技術大学院大学バイオサイエンスセンター研究科 教授 島本 功

RNA 核外輸送の多様性とその制御機構 徳島大学 ゲノム機能研究センター分子機能解析分野 助教授 塩見美喜子
京都大学ウイルス研究所情報高分子化学研究分野 教授 大野 睦人

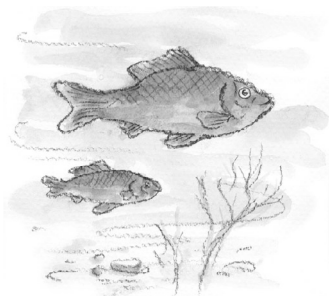
IRES 依存的翻訳開始とその制御 東京大学大学院 医学系研究科 微生物学講座 教授 野本 明男
参 加 費： 会員(大学・官公庁職員、当財団の賛助会員) 3,000円
非会員5,000円 学生1,000円

申 込 方 法： 氏名、勤務先、所属、〒所在地、電話番号、FAX 番号を明記の上、郵便、FAX または E-mail で下記宛お申込み下さい。

申 込 先： (財)千里ライフサイエンス振興財団シンポジウム S14 事務局
〒560-0082 大阪府豊中市新千里東町1-4-2
千里ライフサイエンスセンタービル 8 階
Tel: 06-6873-2001 Fax: 06-6873-2002
E-mail: tnb-lsf@senri-lc.co.jp

第8回マリンバイオテクノロジー学会大会（マリンバイオ熊本2005）

- 主催： マリンバイオテクノロジー学会
会期： 平成17年5月28日(土)～29日(日)
会場： 熊本県立大学新講義棟（〒862-8502 熊本市月出3-1-100）
発表申込締切： 平成17年2月15日(火)（必着）
予稿原稿締切： 平成17年2月15日(火)（必着）
発表形式： 口頭発表（質疑含み15分，OHP 使用），ポスター発表
大会内容： 1．一般講演（口頭発表，ポスター発表），2．シンポジウム，3．懇親会
一般講演のセッション： 以下の9セッションを予定しております。①微生物 ②微細藻 ③海藻・付着生物 ④魚介類 ⑤天然物・未利用資源 ⑥バイオミネラル化セッション ⑦マリンゲノム ⑧環境・温度適応 ⑨その他
- 参加・発表登録申込方法： 参加をご希望の方は申込者氏名・所属及び連絡先（住所，電話番号，メールアドレス）を，発表をご希望の方は申込者氏名・所属及び連絡先，発表希望セッション，希望発表形式，発表者氏名・所属略記（連名の方全員），演題を明記の上，下記の申込先までお申込下さい（電子メールをご利用下さい）。なお発表者は学会会員に限らせていただきます。詳しくは大会ホームページを御覧下さい。口頭発表演題数が多い場合，事務局の判断によりポスター発表をお願いすることがありますので，ご了承下さい。
- 参加登録費： （平成17年4月5日(火)まで）会員 一般5,000円，学生3,000円；非会員 一般9,000円，学生4,000円
（平成17年4月6日(水)以降）会員 一般7,000円，学生4,000円；非会員 一般10,000円，学生5,000円（すべて講演要旨集代を含みます）
- 懇親会： 平成17年5月28日(土) 19時～21時（会費 一般6,000円，学生3,000円 会場：熊本交通センターホテル 3階大ホール）
- 大会事務局，問合せ先： 〒862-8502 熊本市月出3-1-100
熊本県立大学環境共生学部内 第8回マリンバイオテクノロジー学会大会事務局
電話：096-383-2929 内線771，776，FAX：096-384-6765，
電子メール：marinebi@pu-kumamoto.ac.jp
- 学会ホームページ： <http://wwwsoc.nii.ac.jp/jsmb/>
大会ホームページ： <http://www.pu-kumamoto.ac.jp/~marinebi/>
一般シンポジウムとして，5－6 課題を予定しています。
* 海洋天然物有機化学研究の最前線
* 海洋ウイルスの研究最前線（仮題）
* 魚類養殖場の環境改善の試み
残り2－3 課題は公募中です。シンポジウム課題案をお持ちの方は大会事務局までご連絡下さい。



★独立行政法人 農業・生物系特定産業技術研究機構 生物系特定産業技術研究支援センター★

2005年度 新規研究課題募集のお知らせ

——生物系産業創出のための異分野融合研究支援事業——

☆事業の趣旨

生物系特定産業技術研究支援センター（生研センター）では、農林水産業、飲食料品産業等生物系特定産業分野において、新事業の創出や起業化の促進につながる画期的な技術開発を推進しています。

このため、新事業の創出につながる技術開発を行う「異分野融合研究開発型」並びに起業化の促進につながる技術開発を行う「起業化促進型」について、新規研究課題を下記により募集します。

☆研究分野・応募資格・研究期間・研究費・採択予定課題数

○異分野融合研究開発型

■研究分野： 新事業創出につながる技術開発

■応募資格： 民間企業、大学、独立行政法人等が参加し、異分野にまたがる複数の研究者が共同して研究を行う研究共同体（コンソーシアム）

■研究期間： 原則として3～5年間

■研究費： 1コンソーシアム当たり年間60百万円程度を上限

■採択予定課題数： 5課題程度

○起業化促進型

■研究分野： 独創的な発想や研究シーズを活かしたベンチャー創出につながる技術開発

■応募資格： ベンチャー創出を目指す民間企業、大学、独立行政法人等の研究者（個人、複数の別は問わない）

■研究期間： 原則として2年間

■研究費： 1課題当たり年間26百万円程度を上限

■採択予定課題数： 10課題程度

☆募集期間 2005年3月1日（火）～2005年3月15日（火）17時締切

☆課題の選定方法

学識経験者等で構成される課題選考のための委員会による第1次審査（書類審査）及び第2次審査（面接審査）を行い、採択課題を選定します。

☆スケジュール

3月1日 受付開始

3月15日 受付終了（必着）

4月 一次審査（書類審査）

5月中下旬 二次審査（面接審査）

6月 採択課題決定

7月～ 委託試験研究契約締結（研究開始）

♪応募要領・様式は生研センターのホームページよりダウンロードできます。

◆問合せ先◆

独立行政法人 農業・生物系特定産業技術研究機構 生物系特定産業技術研究支援センター（生研センター） 新技術開発部 技術開発課

〒105-0001 東京都港区虎ノ門3-18-19 虎ノ門マリビル10階

TEL: 03-3459-6567 FAX: 03-3459-6577

URL <http://brain.naro.affrc.go.jp/tokyo/>（生研センターホームページ）

（新技術・新分野創出のための基礎研究推進事業においても新規課題募集を行っています。）

◆組換え植物実験について依頼◆

私は2004－2005年度の日本植物生理学会の会長をしておりますが、当学会から遺伝的組換え植物の研究について国や地方自治体に対して以下のような提言を出すことを考えております。

日本遺伝学会でもこの問題について関心を持っておられる会員が多い（私も会員の一人ですが）と思いますが、この提言について日本遺伝学会として賛同していただくことは可能でしょうか。

近日中に当学会の幹事長からも同様な依頼の連絡を差し上げますが、この件についてご配慮いただけると幸いです。

よろしくお願い致します。

岡田 清孝

貴学会の益々のご発展をお慶び申し上げます。

日本植物生理学会は1959年に設立され、現在では植物生理学ばかりでなく植物基礎科学の広い範囲にわたる研究者によって運営されております。会員数は3000名を超えました。

最近では、社会と科学研究との間で十分なコンセンサスが必要とされる局面が増えてきました。植物の基礎科学研究に関わる大きな問題として、遺伝子組換え植物（GM 植物）の食品としての安全性や野外での栽培における遺伝子交雑の問題があります。諸外国での動きを受けて、我が国のいくつかの自治体では、GM 植物の栽培や研究を制限することを目的とした条例の策定が進められています。我々植物科学の研究者は、これらの問題点についての科学的な基準に基づいた判断と意見を述べる責任があると思いますが、そのためにも遺伝子組換え植物の基礎研究に対する過度の規制を廃することと、科学的根拠に基づいた知識を社会に向けて積極的に情報発信するための体制を作ることが重要だと考えております。

当学会では、数年前からこの問題について委員会で議論を積み重ねて参りましたが、以下のような文章を内閣府の総合科学技術会議をはじめとする国と自治体の関係官庁に提言することに致しました。

貴学会におかれましても、この問題について強い関心をお持ちと伺っています。私どもの提言の内容についてご審議いただき、提言内容にご賛同頂けるなら、その旨を記して提出させていただけないかと考えております。平成17年1月中には政府に提言を提出するとともに、広く社会にも発信したいと考えておりますので、早急にご意見をお聞かせいただけると幸いです。

よろしくお願い致します。

日本植物生理学会

会 長 岡田 清孝

幹事長 長谷あきら

提言：「遺伝子組換え植物の社会における適切な受容を進める体制を求む」

近年の急激な人口増加や、地球規模の開発によってもたらされる食糧不足と環境悪化は、21世紀における人類の持続的な発展の可能性を妨げる大きな問題として私達に提起されています。これらの問題解決のために、地球上の全ての生命を支えている多様な植物を保全し、それらを活用していくことの重要性が強く認識されています。植物科学はそのための知識と技術の基盤となる学問であり、特に近年のゲノム生物学に基づいた多様な技術の発展は、農作物をも対象としたこの分野の研究をさらに重要なものとしつつあります。実際、その重要性が認識されて、アメリカ合衆国では2001年から植物ゲノムプロジェクトが開始され、ヨーロッパでも、植物科学を推進するための20年計画が、最近発表されました。

植物科学がもたらす新しい知識と技術の中で、今、社会に大きな影響を与えているのが、遺伝子組換え技術とその技術で作られた遺伝子組換え植物です。遺伝子組換え技術は、植物科学のみならず、医学も含めた現代生命科学に必須の技術です。遺伝子組換え技術を用いた作物の開発や食品への利用は、わが国における食糧戦略の根幹をなす重要な課題であり、このことはわが国政府のバイオテクノロジー戦略大綱にも謳われているところです。

遺伝子組換え作物の食品としての利用に関しては「食品安全基本法」や「食品衛生法」に基づき、また、飼料としての利用に関しては「飼料安全法」に基づき、科学的に判断されることとなっています。こうした安全性確認が既に多くの遺伝子組換え作物でなされ、これらの作物は、現実に利用されています。また、環境への安全性については、平成15年施行の「遺伝子組換え生物等の使用等の規制による生物の多様性の確保に関する法律（通称「カルタヘナ担保法」）」のもと、科学的根拠に基づいて安全を確保するための制度が国により整備されているところです。

しかし、最近、現実には生じていることは、複数の自治体において、「消費者の不安への配慮」あるいは「風評被害」などを理由として遺伝子組換え作物の栽培規制の方針が示されていることであります。この背景には、消費者の遺伝子組換え作物に対する根強い忌避感があるものと思われます。しかし、遺伝子組換え作物に対するこのように過剰なまでに否定的な風潮が継続すると、人類の持続的発展に不可欠である基礎および応用分野における植物科学研究の基盤を根底から損なう恐れがあります。また、すでに国内で大量に消費されている遺伝子組換え作物を使用した食品に対しても、いたずらに不信感を増大させることになりかねません。

このような状況下で、前述のバイオテクノロジー戦略大綱に従って、遺伝子組換え植物や食品に対して国民の理解と信頼が得られるよう安全性と効果に関する情報の提供を行い、リスクコミュニケーション・システムの構築を進めることは、まさに社会的急務であり、政府にとって重要な政策課題であると思います。

以上の視点から、植物科学分野の専門家集団としての日本植物生理学会は、その活動に求められる社会的責務を自覚するとともに、次のことを政府に提言します。

1. 政府は、内閣府のリーダーシップのもと関連各省庁や都道府県関係者等の調整を図り、遺伝子組換え植物の基礎研究に対する過度の規制を廃し、遺伝子組換え作物由来の食品の安全性に関する科学的根拠に基づいた知識を、社会に向けて積極的に情報発信するための体制を作る。

私たちは、遺伝子組換え技術の開発やその利用に携わる者として、安全性について十分な配慮をしつつ研究を進めるとともに、上記提言の実現を政府に強く訴え、また社会的責務を果たす一環として、科学的根拠に基づいた情報を発信していくために一層の努力と協力を惜しまないことをここに表明します。

◆日本植物生理学会へ日本遺伝学会からの回答◆

日本植物生理学会会長

岡田 清孝 様

提言「遺伝子組換え植物の社会における適切な受容を進める体制を求む」への賛同の可否につきまして、日本遺伝学会では評議員会に意見を求めておりました。回答とりまとめに手間取りご連絡遅れましてご迷惑をおかけしております。

さて結果は学会評議員の多数の方が賛同を可と回答されましたが、現状認識についての文言ならびに提言の内容に幾ばくかの疑問点もあり、ご提案いただきました原案にしかるべく改訂をご検討頂ければ賛同という結論に達しました。なお、評議員から寄せられました意見を2点添付しましたのでご一読頂ければ幸いです。

遺伝学会も1昨年、貴学会と類似の問題認識をもち一般社会での共同作業を模索しているところであります。これを機会に今後、貴学会と協力関係の実現にむけて努力いたしたく思います。

末筆ながら貴学会の益々の発展を祈ります。

取りあえずお返事まで。

日本遺伝学会会長

石和 貞男

慎重および保留回答者のコメント

- 1) 「慎重にして欲しい」の回答者による理由書全文

「日本植物生理学会からの提言」には、次の文章があります。

しかし、最近、現実には生じていることは、複数の自治体において、「消費者の不安への配慮」あるいは「風評被害」などを理由として遺伝子組換え作物の栽培規制の方針が示されていることであります。この背景には、消費者の遺伝子組換え作物に対する根強い忌避感があるものと思われます。しかし、遺伝子組換え作物に対するこのように過剰なまでに否定的な風潮が継続すると、人類の持続的発展に不可欠である基礎および応用分野における植物科学研究の基盤を根底から損なう恐れがあります。

この現状認識にもとづき、日本植物生理学会の文書では、次の提言を行なっています。

政府は、内閣府のリーダーシップのもと関連各省庁や都道府県関係者等の調整を図り、遺伝子組換え植物の基礎研究に対する過度の規制を廃し、遺伝子組換え作物由来の食品の安全性に関する科学的根拠に基づいた知識を、社会に向けて積極的に情報発信するための体制を作る。

私は、「日本植物生理学会からの提言」に書かれた現状認識は、事実経過に照らして、適切な表現とはいえないと思います。

このままの表現では、遺伝子組換え作物の研究推進を支持しつつ、この問題の解決に真剣に取り組んできた関係者に、かえって迷惑をかけてしまうことを危惧します。

さらに、「基礎研究に対する過度の規制を廃し」という表現は、学会側が、「基礎研究に対する過度の規制がある」と認識しているのとれる表現です。現実には、北海道で決められた条例は、遺伝子組換え植物の基礎研究を奨励するという立場を明確にしたものであり、「過度の規制」とは言えません。この表現は、まじめにこの問題に取り組んでいる農家や消費者団体などから、反発を招くと思います。

現在、遺伝子組換え作物の栽培に関して、条例で規制しようとしているのは、北海道だけです。北海道では、「遺伝子組換え作物の栽培試験に関わる実施条件検討会」を設け、昨年1年間をかけて、実施条件を検討してきました。その結果、実施条件案と条例案ができて、昨年12月25日まで、パブリックコメントが受け付けられていました。

第4回検討会での事務局からの説明は以下のとおりです (<http://www.life-bio.or.jp/topics/topics114.html> より)

対象となる試験研究機関は、国公立、道内の大学と高専、民間の生産者（試験研究を業務として実施する事業者）で、試験研究施設の条件は、大卒や高専卒以上で、組換え試験研究の実務経験を有する専業研究従事者が2名以上いる。種子や収穫物の管理・保管ができる施設とする。試験栽培計画を作成後、周辺地域への説明会を経て、知事に届出る。知事は交雑・混入防止措置について食の安全・安心委員会（専門委員会の報告を受けて）の意見を聞き調査・審議をし、事業者に対して指示を与えることができる。一般商業栽培は許可制。開放系栽培試験を実施する際は、農林水産省の栽培実験指針に従い、知事への報告義務や事業者は知事の指示に従うことを加えた形になっている。）

この説明に対して、「実施条件は規制をしていく方向で定めるべき。試験研究を「促進」というのはそぐわない。」と発言した委員もいましたが、事務局側からの説明は、「農政部としてだけでなく、道庁としての態度は研究の積極促進。市民の不安があるので、促進を前提として、一定の規制を行うという姿勢は前から変わっていない。」というものです。基本的に、この方針に沿って、実施条件案がまとめられました。

条例制定によって新たに加わる制約は、知事への報告義務と、知事からの指示に従う義務ですが、私はこれを過度な規制とは言えないと思います。条例案の定めによれば、報告を受けた知事は、研究者を含む「食の安全・安心委員会」に意見聴取します。「食の安全・安心委員会」は、研究者数名で組織される「専門家委員会」に検討を付託し、その報告にもとづいて、知事に意見を言うことができます。知事は、この意見にもとづいて、事業者に指示を与えることができます。この仕組みであれば、農林水産省の栽培実験指針に従っている限り、開放系栽培試験の実施に支障が生じるとは考えられません。

北海道の条例案と実施条件案は、遺伝子組換え作物そのものに批判的な立場の委員を含む検討会でのねばりづよい合意形成の努力の結果、研究の積極促進という道の立場を基本にして策定されたものです。研究者はこのような合意形成の努力を尊重し、道民・市民に安心感を与え、遺伝子組換え作物の研究に対する理解を広げる努力をすべきだと思います。

しかし、「日本植物生理学会からの提言」の文章は、上記のような努力の末に作られた条例案を「過度な規制」と批判しているように受け取れます。このことは、「学者エゴ」という批判を招きかねず、遺伝子組換え作物の研究に対する冷静な理解を広げるうえで、かえってネガティブな影響を持つのではないかと危惧しています。

以上のような点で、「日本植物生理学会からの提言」をそのままの形でサポートすることには、慎重であるべきだと考えています。

なお、「遺伝子組換え作物の栽培等に関する条例（仮称）素案」およびそれに関連する文書は、北海道庁のウェブサイトの以下のページで見ることができます。

<http://www.pref.hokkaido.jp/nousei/ns-rtsak/shokuan/conf.html>

「遺伝子組換え作物の栽培試験に関わる実施条件検討会」第1回～第4回の記録は、次のページで見ることができます。

<http://www.pref.hokkaido.jp/nousei/ns-rtsak/shokuan/gm-jissijouken.htm>

とくに、実施条件案を定めた、第4回検討会が出た意見は、次のページで報道されています。

<http://www.life-bio.or.jp/topics/topics114.html>

2) 「賛否の回答を保留したい」回答者による理由書全文

- 1) 科学者のみならず国民的合意形成を促す体制を提言すべきです。（遺伝学会としては、組換え植物のみならず組換え動物も含めて考えるべきだと思います。また、外来生物の導入についても一部同様の問題が有り、遺伝学会も責任ある立場だと思います。）
- 2) 遺伝子組換え植物の基礎研究の重要性については賛同します。



日本遺伝学会木原賞および奨励賞候補者の推薦のお願い

下記の規程に添って木原賞および奨励賞の候補者の推薦方をお願いします。

なお、推薦される方は、もし被推薦者が受賞者となられた場合は、当学会誌に英文総説の執筆をお願いしたい旨お伝え下さい。

日本遺伝学会会長 石和 貞男

日本遺伝学会学会賞および奨励賞に関する規程（抜すい）

（目的）

遺伝学の進歩を促し、すぐれた研究業績を一般に知らせるために学会賞および奨励賞を設定する。

（賞の種類）

1. 日本遺伝学会木原賞
遺伝学の分野ですぐれた業績をあげた者（原則として会員）に授与する。
2. 日本遺伝学会奨励賞
遺伝学の特定の分野ですぐれた研究を活発に行い、将来の成果が期待される比較的若い研究者（原則として40歳以下の会員）に授与する。

（賞の内容）

1. 日本遺伝学会木原賞
賞状、メダルおよび副賞としての賞金からなる。
2. 日本遺伝学会奨励賞
賞状および副賞としての賞金からなる。

（賞の選考）

賞の選考は下記に定められた選考委員会と選考方法によって行う。

1. 選考委員会
全会員を対象として評議員会により選出された若干名と、これに会長が加わり、選考委員会を構成する。会長以外の選考委員は任期を2年とし、連続して2期（4年）をこえ選考委員としてとどまることはできない。
選考委員会の委員長は会長がつとめるものとする。
2. 選考方法
会員から推薦された候補者について選考委員が慎重に審査を行い、受賞者を決定した上で評議員会の承認を得るものとする。日本遺伝学会木原賞受賞者については原則として毎年1名とするが、適当な候補者がいない場合は授賞は行わないものとする。
日本遺伝学会奨励賞については毎年2名以内を選ぶものとする。

附 則

昭和57年11月20日	日本遺伝学会総会承認
昭和60年10月14日	1 部改正
昭和63年 2 月 6 日	1 部改正
1989年10月14日	1 部改正
1992年10月23日	1 部改正

2005年度日本遺伝学会木原賞候補者推薦書

2005年 月 日

推 薦 者	
(ふりがな) 氏 名	印
推薦者の職名	
連 絡 先	〒 TEL FAX E-mail

受 賞 候 補 者	
(ふりがな) 氏 名	(西暦) 年 月 日生
候補者の職名	
連 絡 先	〒 TEL FAX E-mail

【略 歴】

受賞候補者	氏の推薦理由等
研究題目 (和文)	
(英文)	
【推薦理由】	
(紙面不足の場合は別紙 [B 5 版] に記載し、添付して下さい)	

注： 候補者の主な発表論文のリストを別紙（紙は B 5 判を使用）に掲載し，うち主要な論文 5 篇 3 部
ずつを添付して下さい．ここに示した推薦書に必要な情報が記載してあれば，用紙 [B 5 版] は
別紙でも結構です．

提出期限： 2005 年 5 月 31 日(火) (必着)

提 出 先： 〒411-8540 静岡県三島市谷田1111 国立遺伝学研究所内 日本遺伝学会

TEL・FAX 055-981-6736

2005年度日本遺伝学会奨励賞候補者推薦書

2005年 月 日

推 薦 者	
(ふりがな) 氏 名	印
推薦者の職名	
連 絡 先	〒 TEL FAX E-mail

受 賞 候 補 者	
(ふりがな) 氏 名	(西暦) 年 月 日生
候補者の職名	
連 絡 先	〒 TEL FAX E-mail

【略 歴】

【遺伝学会における活動歴】

(キ
リ
ト
リ
線)

受賞候補者	氏の推薦理由等
研究題目（和文） （英文）	
【推薦理由】	

（紙面不足の場合は別紙「B5版」に記載し、添付して下さい）

注：（１）候補者の主な発表論文のリストを別紙（紙はＢ５判を使用）に掲載し、うち主要な論文２篇３部ずつを添付して下さい。ここに示した推薦書に必要な情報が記載してあれば、用紙〔Ｂ５版〕は別紙でも結構です。

(2) 候補者は原則として40歳以下の会員とします.

提出期限： 2005 年 5 月 31 日(火) (必着)

提出先: 〒411-8540 静岡県三島市谷田1111 国立遺伝学研究所内 日本遺伝学会

TEL · FAX 055-981-6736

2005年度日本遺伝学会 会費納入についてのお願い

本会の会費は前納をたてまえとしております。2005年度分（Genes & Genetic Systems Vol. 80 を含む）の会費を、御納入下さいますようお願いいたします。学生会員の方は在学証明書かそれに代わるもの（振替用紙の通信欄に指導教官などの署名・捺印）をお送り下さい。

1年以上の滞納者は会則第5条によって会員の資格を失いますのでご注意下さい。

記

普通会員	10,000円
学生会員	6,000円
外国会員	10,000円
機関会員	15,000円
賛助会員（1口）	20,000円

〒411-8540 静岡県三島市谷田1111

国立遺伝学研究所内

日本遺伝学会

電話 055-981-6736

FAX 055-981-6736

振替口座番号 00110-7-183404

加入者名 日本遺伝学会

この納入のお願いは本会記事綴じ込みのもので、すでに会費を納入された方にも、お送りいたしております。その節は失礼の段お許し下さい。

日本遺伝学会 入会変更申込書

年 月 日

日本遺伝学会会長殿

氏 名 (楷 書)	ふりがな
	印
	ローマ字
生 年 月 日 (西 暦)	年 月 日 生

いずれかの○に✓をご記入下さい。

- 貴学会に入会したいので必要事項を書き添えて申し込みます。
- 異動がありましたのでお知らせ致します。

住 所 (自 宅) 〒

住 所 (英文字)

電話 FAX E-mail:

所属及職名

勤務先 (英文字)

勤務先所在地 〒

勤務先所在地 (英文字)

電話 FAX E-mail:

雑誌送付先 〒

最終学歴と卒業／修了年

現在の専門分野

加入学会名 (本学会以外の)

紹 介 者 (日本遺伝学会会員)

- 変更届の方は、記入の必要はありません。
- 紹介者となる会員名をご記入下さい。なお、不明な点がございましたら日本遺伝学会事務所にお問い合わせ下さい。

入会希望者は本申込書 (申込書用紙はコピーでも可) と同時に会費 1 年分 10,000 円を日本遺伝学会 (〒411-8540 三島市谷田 国立遺伝学研究所内) へお送り下さい。学生の方は在学証明書又はそれに代わるもの (指導教官の署名・印など) をお送り下されば学生会員として扱います (会費 6,000 円)。会費納入後に入会承認書をお送りいたします。

「振替口座 00110-7-183404 加入者 日本遺伝学会」

〒411-8540 静岡県三島市谷田 1111 国立遺伝学研究所内

日 本 遺 伝 学 会

電話 055-981-6736 FAX 055-981-6736

japgenet@lab.nig.ac.jp

◆GGS 編集長交代のお知らせ◆

日本遺伝学会会員 各位殿

日本遺伝学会編集幹事として長い間 GGS の編集長を皆様のご協力で務めさせていただきましたが、2005年度より京都大学農学研究科の遠藤隆先生と編集長を交代することになりました。何とか責任を果たせましたのも皆様にご協力いただきましたお陰と心から感謝いたしております。GGS の編集は Vol. 80 No. 1 まで私が担当いたします。現在投稿中の論文については、私と遠藤先生とで重複して担当することになると思います。今後 GGS への投稿は遠藤先生または直接担当の編集委員宛にお願いいたします。

私も暫く引き継ぎおよびやり残した仕事（online 審査システムの導入等）がありますので、遠藤先生のお手伝いをさせていただく所存です。今後も GGS の発展のためにご協力賜りますようお願いいたします。

日本遺伝学会前編集幹事 品川 日出夫

◆GGS 2005年1月1日ー2005年1月31日におけるアクセス数の集計結果（79巻既刊分）です◆

- ・第2行はjpドメインからのアクセスを、第3行はjpドメイン以外からのアクセスを表します。
 なお、日本国内でjpドメイン以外（.com等）を利用するアクセスや、ドメイン名が不明のアクセスも、othersに包含されています。
- ・第1行の“数字_数字”は、volと論文開始ページを表します。これにより論文が特定可能です。
 例）「1_30」は「vol.1の開始ページが30ページである論文」を表します。
- ・“数字_数字”毎のjp/others別の数字は、各該当論文のPDFダウンロード数を表します。
 尚、平成15年度までの統計ファイルには、アクセスの無かったPDF情報を削除しておりましたが、今年度からはアクセスの無かったPDFも、集計ファイルに含める様に変更致しました。
 ご不明な点などございましたら、JST電子ジャーナル部門までお問い合わせください。

 独立行政法人 科学技術振興機構（JST）
 情報事業本部 知的資産集積部
 電子ジャーナル部門
 〒102-0081 東京都千代田区四番町5-3
 E-MAIL: contact@jstage.jst.go.jp
 TEL: 03-5214-8455 FAX: 03-5214-8460

79_1	2	17	79_87	0	6	79_165	0	4	79_245	1	8
79_9	1	4	79_95	3	7	79_177	1	3	79_251	0	11
79_19	0	4	79_105	0	2	79_183	0	6	79_255	3	25
79_27	0	6	79_119	1	8	79_189	3	4	79_263	3	6
79_41	0	2	79_125	0	4	79_199	2	13	79_271	2	26
79_49	0	12	79_129	0	3	79_207	1	13	79_283	2	32
79_53	0	15	79_139	0	11	79_213	0	19	79_293	1	36
79_65	1	12	79_145	0	6	79_227	7	40	79_301	2	43
79_77	3	6	79_151	0	8	79_233	0	7	79_307	2	23

PDF小計 116 1668

◆J-STAGE 利用規約改訂につきまして◆

貴会の Genes & Genetic Systems 誌に掲載されている各論文の書誌事項、抄録につきましては、J-STAGE の規約である「科学技術情報発信・流通総合システム利用規約」(「利用規約」)の第6条第2項により文献データベース作成に無償で利用できることになっておりますが、システムの準備等が必要であったことから、無償利用は行わず、別途頂いている「抄録利用許諾」に基づいて有償にて利用させて頂いておりました。

このたびシステム等の準備が整い、平成17年度より文献データベース作成に直接利用できる見通しとなりました。これに合わせ、文献データベース作成時の利用に関する当機構の実務準則として「J-STAGE 登載文献の利用細則」(「利用細則」)を整備し、これに伴いJ-STAGE の規約である利用規約を改訂する運びとなりました。新利用規約及び利用細則とも2005年3月末日付の発効を予定しております。ひらくと申し上げますと、今年の4月から Genes & Genetic Systems 誌の書誌事項と著者抄録を無償で利用させて頂くこととなりました。(畧)

大倉 克美 Katsumi OHKURA

科学技術振興機構 情報事業本部 <http://www.jst.go.jp/>

知的資産集積部 データベース企画課 課長

〒102-0081 東京都千代田区四番町5番地3

phone: 03-5214-8431 fax: 03-5214-8460

e-mail: ohkura@jst.go.jp

文献データベース作成工程への電子ジャーナルの活用開始に伴う J-STAGE 利用規約改訂につきまして

平成17年1月25日

科学技術振興機構

情報事業本部

知的資産集積部

時下ますますご清栄のこととお喜び申し上げます。

科学技術振興機構 (Japan Science and Technology Agency 略称 JST) は、わが国における科学技術基本計画の中核の実施機関として技術シーズの創出を目指した、基礎研究から企業化までの一貫した研究開発の推進、科学技術情報の流通促進などの事業を展開しております。その一環として国内外の科学技術文献情報に基づく文献データベースの作成、提供を行っています。

当機構においては、文献データベース作成の効率化及び速報性の向上を図る観点からデータベース作成工程への電子ジャーナルの利用について準備を進めてまいりました。貴会にご利用いただいている当機構の科学技術情報発信・流通総合システム (「J-STAGE」) に登載された科学技術刊行物 (電子ジャーナル) に含まれる情報につきましては、J-STAGE の規約である「科学技術情報発信・流通総合システム利用規約」(「利用規約」)の第6条第2項によりデータベース作成に利用できることになっておりますが、このたび平成17年度より文献データベース作成に直接利用できる見通しとなりました。

これに合わせ、文献データベース作成時の利用に関する当機構の実務準則として「J-STAGE 登載文献の利用細則」(「利用細則」)を整備し、これに伴いJ-STAGE の規約である利用規約を改訂する運びとなりました。新利用規約及び利用細則とも2005年3月末日付の発効を予定しております。

新利用規約、利用細則については添付別紙1及び2をご覧ください。利用規約の改訂につきましては、規約の変更手続について定める現利用規約第13条の規定に従い、2005年2月末日ころ当機構より貴会へ電子メールにて改訂内容を正式に通知いたしますが、予めお知らせしご説明申し上げる次第です。

また、冊子体に掲載された著者抄録については、これまで著者抄録利用許諾をいただき文献データベース作成に利用させて頂いておりましたが、上記のような利用方法の変更に伴い、改めて利用許諾をお願いする次第です。以上

(科学技術刊行物の登載及びその条件)		
	現 行	改 訂
第 6 条	1. 利用学協会等は、総合システムを利用して電子化された科学技術刊行物を全て総合システムに搭載するものとする。	1. 利用学協会等は、総合システムを利用して電子化された科学技術刊行物を全て総合システムに登載するものとする。
	2. 機構は、総合システムに登載した科学技術刊行物の、次の各号に記載される情報を無料で利用することができる。 (1)電子媒体情報作成・提供及び雑誌発行のための著者抄録情報 (2)電子媒体情報作成・提供及び雑誌発行のための書誌情報 (3)機構及び他の機関の電子媒体情報へ引用リンクを張るための引用あるいは参照情報	2. 機構は、総合システムに登載した科学技術刊行物の、次の各号に記載される情報を無償にて利用することができる。但し、文献データベース作成時の利用については、機構の定める「J-STAGE 登載文献の利用細則」(以下「利用細則」という。)に従うものとする。 (1)著者抄録情報 (2)書誌情報 (3)引用情報及び参照情報
	3. 機構は、総合システムに登載した、科学技術刊行物を、機構の作成するデータベースの作成時に無料で閲覧あるいは参照することができる。	3. 機構は、総合システムに登載した科学技術刊行物の全文情報を、機構の作成する文献データベースの作成時に無償にて閲覧あるいは参照することができる。
	4. 機構は、利用学協会等の承諾を得た上で、総合システムに登載した科学技術刊行物の、次の各号に記載される情報を利用することができるものとする。 (1)第三者への原文献提供のための全文情報 (2)その他機構と利用学協会等が合意した情報	4. 機構は、利用学協会等の承諾を得た上で、総合システムに登載した科学技術刊行物の、次の各号に記載される情報を利用することができるものとする。 (1)第三者への原文献提供のための全文情報 (2)その他機構と利用学協会等が合意した情報
	5. 機構は、利用学協会等が総合システムに登載した科学技術刊行物により第三者が損害を被った場合、その責を負わないものとする。	5. 機構は、利用学協会等が総合システムに登載した科学技術刊行物により第三者が損害を被った場合、その責を負わないものとする。
	6. 機構は、利用学協会等が総合システムに登載した科学技術刊行物が公序良俗に反する恐れのある場合は、その登載を拒否することができる。	6. 機構は、利用学協会等が総合システムに登載した科学技術刊行物が公序良俗に反する恐れのある場合は、その登載を拒否することができる。

(2004年12月28日)

2005・2006年度

評 議 員 各位

cc. 幹事各位

日本遺伝学会

2005・2006年度会長

石 和 貞 男

2005年度第1回評議員会開催等について

このたび、2004年9月26日開催の評議員会および9月28日開催の日本遺伝学会第76回大会の総会において、新年度の会長および評議員が選挙結果のとおり承認され、その後新幹事会の構成による調整をへて2005・2006年度の会長・評議員・幹事が会則に基づき決定いたしました。その経緯は別便にてご報告した通りでございます。石和は、前期に続きまして会長に就任することになりました。どうかよろしくお願い申し上げます。

なお、第1回評議員会開催を2005年3月頃に予定いたしております(編集者注:その後4月4日と決定しました)。日程・場所・議題その他詳細は、おってご案内申し上げますので、その節はどうかよろしく。2005・2006年度の日本遺伝学会の幹事につきましては、本学会会務を遅滞なく行うためもありまして前年度評議員会にご報告、了承頂いております。

担 当

氏 名 (敬称略)

国内庶務幹事

田嶋 文生 (東京大学) 留任

渉外庶務幹事

福井 希一 (大阪大学)

会 計 幹 事

斎藤 成也 (国立遺伝学研究所) 留任

編 集 幹 事 (編集長)

遠藤 隆 (京都大学)

企画集会幹事

城石 俊彦 (国立遺伝学研究所)

将来計画幹事

高畑 尚之 (総合研究大学院大学) 留任

特別幹事 (新設。名称は仮)

品川日出夫 (大阪大学微生物病研究所)

品川先生には、GGs (2005) No. 1 まで編集を担当して頂きますが、それ以降は遠藤新編集長の顧問としてアドバイスをお願いして雑誌編集の継続性に配慮していただきます。また、新設されました GGS 論文賞の選考についても委員をお願いする予定です。

なお、77回大会五条堀 孝委員長にも原則として幹事会に出席を依頼します。

以上

生物科学学会連合委員の皆様

拝啓、生物科学学会連合の事務を担当してくれていた学会事務センターが昨夏に消滅して以降、連合の実質的な活動はストップした状態で推移してきました。このことに対し、平成16年度の幹事としてお詫び申し上げます。

現在の我が国の科学、大学をとりまく状況から、生物科学分野の学会が連携を密にして活動していく必要性についてはもとより疑うべくもありません。このたび動物学会／発生生物学会長の浅島誠先生と意見交換をし、生物科学学会連合を実体あるものとして早急に立て直す必要があるということで意見の一致をみました。

ただし、過去を振り返ってみると、連合がいくつかのポジティブな取り組みをなしとげてきたことはまぎれもない事実ですが、それらを貫く強いディシプリンが連合に存在していたかには疑念が感じられ、また、連合の活動が各学会にきちんとフィードバックされていたかにも弱さがあったように思われます。

今回の不運な活動中断を契機として、生物科学学会連合の基本的な性格付けをも含めて議論し、連合をリセットしてはいかかというのが浅島先生と私からの提案です。具体的にその議論をする会合を2月末か3月上旬に持ちたいと考えます。大幅な改革案、あるいはこれまで以上の活動の拡大は難しだろうというご意見など、その場で大いに討論して頂きたいと思います。

ご賛同頂ける場合、各学会からどなたに出席して頂いても結構ですが、連合の基本性格や今後の運営体制などを決める会議となりますので、できるかぎり各学会のご意見を代表することを委ねられた立場で参加して頂けることを望んでおります。

以上を踏まえて、日程調整させて頂きたいと思います。各学会からご参加くださる先生のご都合を別紙の日程調整表にご記入の上ご返送ください。会場としてはこれまで通り、東京・本郷周辺地区を予定しております。どうかよろしくご高配のほどお願いいたします。

敬具

2005年2月4日

生物科学学会連合幹事

日本分子生物学会 山本 正幸

(注) 日本遺伝学会は、城石俊彦企画集会幹事に出席をお願いしています。

◆会 員 異 動◆

新入会・再入会

佐 野 浩	630-0192	奈良県生駒市高山町8916-5 奈良先端科学技術大学院大学遺伝子教育センター植物細胞工学
佐々木 卓 治	305-8602	茨城県つくば市観音台2-1-2 農業生物資源研究所ゲノム研究グループ
竹 内 有	102-8554	東京都千代田区紀尾井町7-1 上智大学・生命科学研究所
EUN-MEE KANG		Seodaemun P.O Box 289, Seoul 120_600 Korea

住 所 変 更

津 田 弘 久	862-8006	熊本市龍田1丁目13-63
伊 藤 秀 臣	411-8540	静岡県三島市谷田1111 国立遺伝学研究所総合遺伝研究系育種遺伝研究部門
辻 野 史	240-0193	神奈川県三浦郡葉山町湘南国際村 総合研究大学院大学 先端科学研究科
太 田 欽 也	650-0047	神戸市中央区港島南町2-2-3 発生・再生科学総合研究センター 形態進化研究チーム
加 藤 徹	060-0810	札幌市北区北10条西8丁目 北海道大学大学院理学研究科生物科学専攻系統進化学講座 I
手 島 康 介		Dept. of Ecol. and Evol. Biology Brown University 80 Waterman Street, Box G-W Providence RI 02912, U. S. A.

久原 篤, 金 愛晃, 小穴孝夫, 西頼広美, 渡辺邦秋, 菊農桂子, 近藤準一, 牧野祐生, 土生智恵美,
金子明石, 木谷義明, 天野悦夫, 田中教之, 高橋秀二郎, 勝部 悟 武智克彰 安川洋生, (株)日本保険機構

訃 報

E. B. LEWIS 外国名誉会員 2004年 6 月21日に逝去されました。享年86歳

謹んで、哀悼の意を捧げます。

寄贈図書・交換図書

科学	Vol. 74 No. 10 (2004)	～ Vol. 74 No. 12 (2004)	Vol. 75 No. 1 (2005)
農業生物資源研究所年報 (平成15年度)			
ACTA SOCIETATIS BOTANICORUM POLONIAE	Vol. 69 No. 3 (2000)	～ Vol. 69 No. 4 (2000)	
	Vol. 70 No. 1 (2001)	～ Vol. 70 No. 4 (2001)	
	Vol. 71 No. 1 (2002)	～ Vol. 71 No. 4 (2002)	
	Vol. 72 No. 1 (2003)	～ Vol. 72 No. 4 (2003)	
Acta zoologica cracoviensia		Vol. 46 No. 4 (2003)	
	Vol. 47 No. 1 (2004)	～ Vol. 47 No. 2 (2004)	
MONOGRAPHIAE BOTANICAE	Vol. 87 (2000)	～ Vol. 88 (2000)	
		Vol. 89 (2001)	
		Vol. 90 (2002)	
	Vol. 91 (2003)	～ Vol. 92 (2003)	
Journal of Applied Genetics	Vol. 44 No. 3 (2003)	～ Vol. 44 No. 4 (2003)	
		Vol. 45 No. 1 (2004)	
folia biologica	Vol. 51 No. 3 (2003)	～ Vol. 51 No. 4 (2003)	
	Vol. 52 No. 1 (2004)	～ Vol. 52 No. 2 (2004)	
CHINESE QINGHAI JOURNAL OF ANIMAL AND VETERINARY SCIENCES			
	Vol. 34 No.4 (2004)	～ Vol. 34 No. 6 (2004)	
Annual Report			(2004)
JOURNAL OF CHINA-JAPAN FRIENDSHIP HOSPITAL			
	Vol. 18 No. 4 (2004)	～ Vol. 18 No. 5 (2004)	
Chinese Journal of APPLIED & ENVIRONMENTAL BIOLOGY			
	Vol. 10 No. 4 (2004)	～ Vol. 10 No. 5 (2004)	

(鈴木真有美, 05/01/31現在)

2005年～2006年度役員・評議員

会 長 石 和 貞 男

〒187-0022

東京都小平市上水本町1-14-11

Tel. 042-323-6720; fax 042-323-6720; s-ishiwa@gf77.so-net.ne.jp

評 議 員

(全国区)

郷 通子 長浜バイオ大学バイオサイエンス学部
〒526-0829 長浜市田村町1,266番地
Tel. 0749-64-8127; fax 0749-64-8126; m_goh@nagahama-i-bio.ac.jp

五條堀 孝 国立遺伝学研究所 生命情報・DDBJ 研究センター
〒411-8540 静岡県三島市谷田1111
Tel. 055-981-6847; fax 055-981-6848; tgojobor@genes.nig.ac.jp

河野 重行 東京大学大学院新領域創成科学研究科
〒277-8562 千葉県柏市柏の葉5-1-5新領域生命棟601
Tel. 04-7136-3673; fax 04-7136-3674; kawano@k.u-tokyo.ac.jp

米田 好文 東京大学大学院理学系研究科生物科学専攻
〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1
Tel. 03-5841-4454; fax 03-5841-4454; komeda-y@biol.s.u-tokyo.ac.jp

真木 寿治 奈良先端科学技術大学院大学バイオサイエンス研究科
〒630-0101 生駒市高山町8916-5
Tel. 0743-72-5490; fax 0743-72-5499; maki@bs.naist.jp

松田 洋一 北海道大学 先端科学技術共同研究センター
〒060-0810 札幌市北区北10条西8丁目
Tel. 011-706-2619; fax 011-736-6304; yomatsu@ees.hokudai.ac.jp

岡田 典弘 東京工業大学生命理工学研究科
〒226-8501 神奈川県横浜市長津田町4259
Tel. 045-924-5742; fax 045-924-5835; nokada@bio.titech.ac.jp

颯田 葉子 総合研究大学院大学
〒240-0193 神奈川県三浦郡葉山町湘南国際村
Tel. 046-858-1574; fax 046-858-1544; satta@soken.ac.jp

東江 昭夫 東京大学大学院理学研究科
〒113-0033 文京区本郷7-3-1
Tel. 03-5841-4465; fax 03-5841-4465; toh-e@biol.s.u-tokyo.ac.jp

山本 和生 東北大学大学院生命科学研究所分子生命科学専攻
〒980-8577 仙台市青葉区片平2-1-1
Tel. 022-217-5054; fax 022-217-5053; yamamoto@mail.tains.tohoku.ac.jp

(北海道地区)

佐野 芳雄 北海道大学大学院農学研究科
〒060-8589 札幌市北区北9条西9丁目
Tel. 011-706-2443; fax 011-706-4934; rysano@abs.agr.hokudai.ac.jp

鈴木 仁 北海道大学大学院地球環境科学研究科
〒060-0810 札幌市北区北10条西5丁目
Tel. 011-706-2279; fax 011-706-2279; htsuzuki@ees.hokudai.ac.jp

(東北地区)

木島 明博 東北大学大学院農学研究科附属複合生態フィールド教育研究センター
〒986-2242 宮城県牡鹿郡女川町小乗浜向 15
Tel. 0225-53-2436; fax 0225-53-5303; a-kijima@mail.tains.tohoku.ac.jp

山本 博章 東北大学大学院生命科学研究所
〒980-8578 仙台市青葉区荒巻字青葉
Tel. 022-217-6692; fax 022-217-6692; hyamamoto@mail.tains.tohoku.ac.jp

(関東地区)

定家 義人 埼玉大学理学部分子生物学科
〒338-8570 さいたま市桜区下大久保255
Tel. 048-858-3399; fax 048-858-3384; ysadaie@molbiol.saitama-u.ac.jp

篠崎 一雄 理化学研究所・植物分子生物学研究室
〒305-0074 茨城県つくば市高野台3-1-1
Tel. 029-836-4359; fax 029-836-9060; sinozaki@rtc.riken.go.jp

(東京地区)

小林 一三 東京大学大学院新領域創成科学研究科・メディカルゲノム専攻及び医科学研究科
〒108-8639 東京都港区白金台4-6-1 東京大学医科学研究所1号館2階
Tel. 03-5449-5326; fax 03-5449-5422; ikobaya@ims.u-tokyo.ac.jp

松浦 悦子 お茶の水女子大学理学部生物学教室
〒112-8610 文京区大塚2-1-1
Tel. 03-5978-5377; fax 03-5978-5373; etmatsu@cc.ocha.ac.jp

(中部地区)

広海 健 国立遺伝学研究所
〒411-8540 三島市谷田1,111
Tel. 055-981-6767; fax 055-981-6868; yhiromi@lab.nig.ac.jp

能登原盛弘 名古屋大学大学院システム自然科学研究科
〒467-8501 名古屋市瑞穂区瑞穂町字山の畑1
Tel. 052-872-5820; fax 052-872-5820; noto@nsc.nagoya-cu.ac.jp

(関西地区)

宮下 直彦 京都大学農学研究科
〒606-8502 京都市左京区北白川追分町
Tel. 075-753-6138; fax 075-753-6486; arabis@kais.kyoto-u.ac.jp

下田 親 大阪市立大学大学院理学研究科(生物地球系専攻)
〒558-5855 大阪市住吉区杉本3-3-138
Tel. 06-6605-2576; fax 06-6605-3158; shimoda@sci.osaka-cu.ac.jp

(中国・四国地区)

近藤 勝彦 広島大学大学院理学研究科 附属植物遺伝子保管実験施設
〒739-8526 東広島市鏡山1-4-3
Tel. 082-424-7490; fax 082-424-0738; kkondo@hiroshima-u.ac.jp

村田 稔 岡山大学資源生物科学研究所
〒710-0046 倉敷市中央2-20-1
Tel. 086-434-1205; fax 086-434-1205; mmura@rib.okayama-u.ac.jp

(九州地区)

中別府雄作 九州大学 生体防御医学研究所
〒812-8582 福岡市東区馬出3-1-1
Tel. 092-642-6800; fax 092-642-6791; yusaku@bioreg.kyushu-u.ac.jp

矢原 徹一 九州大学大学院理学研究院
〒812-8581 福岡市東区箱崎6-10-1
Tel. 092-642-2622; fax 092-642-2622; tyahasch@mbox.nc.kyushu-u.ac.jp

幹事・役員

(国内庶務幹事)

田嶋 文生 東京大学大学院理学系研究科生物科学専攻
〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1
Tel. 03-5841-4051; fax 03-3818-5399; ftajima@biol.s.u-tokyo.ac.jp

(渉外庶務幹事)

福井 希一 大阪大学大学院工学研究科生命先端工学専攻
〒565-0874 吹田市山田丘2-1
Tel. 06-6879-7440; fax 06-6879-7441; kfukui@bio.eng.osaka-u.ac.jp

(会計幹事)

斎藤 成也 国立遺伝学研究所
〒411-8540 静岡県三島市谷田1111
Tel. 055-981-6790; fax 055-981-6789; nsaitou@genes.nig.ac.jp

(編集幹事)

遠藤 隆 京都大学農学研究科
〒606-8502 京都市左京区北白川追分町
Tel. 075-753-6137; fax 075-753-6486; ggsgiden@kais.kyoto-u.ac.jp(編集用)

(企画集会幹事)

城石 俊彦 国立遺伝学研究所系統生物研究センター哺乳動物遺伝研究室
〒411-8540 静岡県三島市谷田1111
Tel. 055-981-6818; fax 055-981-6817; tshiros@lab.nig.ac.jp

(将来計画幹事)

高畑 尚之 総合研究大学院大学
〒240-0193 神奈川県三浦郡葉山町湘南国際村
Tel. 0468-58-1502; fax 0468-58-1542; takahata@soken.ac.jp

(特別幹事)

品川日出夫 大阪大学微生物病研究所
〒565-0871 大阪府吹田市山田丘3-1
Tel. 06-6879-8317; fax 06-6879-8320; shinagaw@biken.osaka-u.ac.jp

(第77回大会委員長)

五條堀 孝 国立遺伝学研究所 生命情報・DDBJ 研究センター
〒411-8540 静岡県三島市谷田1111
Tel. 055-981-6847; fax 055-981-6848; tgojobor@genes.nig.ac.jp

日本遺伝学会会則

- 第1条 本会は日本遺伝学会と称する。
- 第2条 本会は遺伝に関する研究を奨め、その知識の普及を計ることを目的とする。
- 第3条 本会は事務所を静岡県三島市谷田、国立遺伝学研究所内におく。
- 第4条 本会に入会しようとするものは住所、氏名および職業を明記して本会事務所に申し込むこと。
- 第5条 本会会員は普通会員、機関会員、賛助会員および名誉会員とする。毎年普通会員は会費10,000円（ただし在学証明書またはそれに代わるものを提出したときは6,000円）を、機関会員は15,000円を、賛助会員は1口（20,000円）以上を前納すること。会員で会費滞納1年におよぶものは資格を失うものとする。
- 第6条 本会は次の者を総会の決議により名誉会員とすることができる。
本会に功労のあった者、外国の卓越した遺伝学者。
- 第7条 本会は隔月1回遺伝学雑誌を発行して会員に配布する。
- 第8条 本会は毎年1回大会を開く。大会は総会と講演会とに分け、総会では会務の報告、規則の改正、役員選挙および他の議事を行い講演会では普通会員および名誉会員の研究発表をする。
大会に関する世話は大会委員若干名によって行い、大会委員長は会長が委嘱する。大会は臨時に開くことがある。
- 第9条 本会は各地に談話会をおくことができる。
- 第10条 本会は会長1名、幹事若干名、会計監査2名の役員、および評議員若干名をおく。
1) 会長は本会を代表し、会務を統轄する。
2) 会長は、評議員が全普通会員の中から選出した複数の候補者から普通会員による直接選挙によって選出される。
3) 評議員は、普通会員による直接選挙で選出される。
4) 幹事は、会長が推薦する候補会員を評議員の過半数が承認することにより選任される。
5) 会計監査は、会長が推薦する候補会員を評議員の過半数が承認することにより選任される。
6) 会長は評議員会を招集し、その議長を務める。幹事は評議員会に出席するものとする。
7) 評議員会は、会員を代表して、事業計画、経費の収支、予算・決算、学会誌の発行、大会の開催、その他重要事項について審議し、出席評議員の過半数をもって議決する。
8) 会長ならびに幹事により幹事会を構成し、会長がこれを代表する。
9) 幹事会は、学会の関連事項を論議し評議員会に諮ると共に、会務を執行する。
10) 会計監査は、学会の会計を監査する。
- 第11条 役員および評議員の任期は2カ年とする。会長および評議員は連続三選はできない。
- 第12条 本会の事務年度は暦年による。
- 付則 平成7年10月13日に第5条を改正し、平成8年1月1日から施行する。

本誌の発行に関しては平成16年度科学研究費補助金（研究成果公開促進費）をうけているので、ここに付記する。

Genes & Genetic Systems 第79巻6号（付録）
2004年12月25日発行 頒価3,000円（本誌とも）
発行者 石和 貞男・品川日出夫
印刷所 レタープレス株式会社
Letterpress Co., Ltd. Japan
〒739-1752 広島市安佐北区上深川町809-5番地
電話 082 (844) 7500
FAX 082 (844) 7800

発行所 日本遺伝学会
Genetics Society of Japan
静岡県三島市谷田1111
国立遺伝学研究所内

学会事務取扱
〒411-8540 静岡県三島市谷田・国立遺伝学研究所内

日本遺伝学会
（電話・FAX 055-981-6736）
（振替口座・00110-7-183404）
加入者名・日本遺伝学会

国内庶務、渉外庶務、会計、企画・集会、将来計画、編集などに関する事務上のお問い合わせは、各担当幹事あてご連絡下さい。

乱丁、落丁はお取替えます。